明治三十八年七月二十六日第三種郵便物認可
明治四十年一月一日　火曜日　光緒三十二年十一月十七日　滿洲日報第四百二十一號

滿洲日報

天下文章歸草

迎年の辭

鳳曆重ね轉して馬年往き羊年來る、春盤相對して往を顧み來を卜すれば、一快呼、一杞憂に値ひするもの極めて多し。

昨三十九年は果して如何なる歳なりしぞ、掀天動地の日露戰爭は、其前年を以て終結し、其戰果は其功略の偉大なるに比して、聊か闊然すへき所ありと雖も、而かも仁聲義聞遠く四海に照布し、內は兵馬の倥偬に由りて一切破壞されたる秩序を回復し、一大反動を以て社會の急轉を牽掣したる年なりき、戰後經營の第一に入手せる年なりき、其務は宜しく先づ昨年の事業界に就て之れを見るへし、西園寺內閣が鉄道國有を畫策せるを始め、商工事業の內地に於て擴張或は新設せらるるもの、日本銀行の調査せる所に依るに、其資本金總額八億三千三百万円と今や我が邦が氣運發展の機に遭際せること此くの如くにして、而して其他政治界にも、軍事界にも、外交界にも、敎育界にも事の刮目に足るもの亦多し、此れ吾徒が一快呼に値ひすと謂ふ所以也。

國運の發展に從ひ、昨年に於て新事業の勃興せるは以上に述ふる所の如し、然れとも此等諸般の事業は纔かに其緒に就けりといふに過ぎずして、既に今年に入れり、今年は眞に經營の年也、昨年は唯た籌畫の年のみ、即ち戰捷國の國民が、官私の別を問はず、[illegible]力として其手腕を發揮するは今[illegible]、然るに吾徒は[illegible]二十[illegible]を有する[illegible]、而[illegible]らに[illegible]の必ず[illegible]以て[illegible]警戒せず[illegible]に至るへし、而[illegible]就既とし[illegible]新設及[illegible]巨資を投せんと[illegible]縮し來るは、動[illegible]抱き[illegible]狂呼し[illegible]に起して、敢て[illegible]する也、此際[illegible]の實果を收めん[illegible]大なる(さも、[illegible]膽は宜し[illegible]水なるへし、此れ吾徒が一杞憂に値ひすと謂ふ所以也。

[illegible]年の計は元旦に在りと、謹ふ[illegible]諸君と之れを講せん。

●鑛業の發展

近時事業界は各種方面に於て勃興しつゝあるが我鑛業界も其の數に洩れずして漸次發展しつゝあり即ち本年の如きは試掘出願五千八百八十四件此の礦區三千六百九十、採掘出願三百七十三件此の礦區五千七百九十、砂礦出願三百七十七件此の礦區二千六百四十八にして出願合計六千六百卅四件此の礦區一万二千四十七の多きに達し昨年に比し概して倍增の有樣なり右は近時銀及び銅價の昂進に依り從來廢坑されたる礦區も手を下して引合ふことに至りしことと是れが原因ならんも特に銅の如きは世界需用の激增に連れ其の供給之れに伴はず銅價は當分現今の高價を維持すへく或は需用の關係より今一段の騰貴を見るやも計られさる趨勢にあるを見込み盛んに試探掘に向へる者の如し右につき當局者は語りて曰く戰後の事業界は各方面に於て面目を革めつゝあるに單り鑛業界のみ安着すへきにあらす素より利の有る處は拔目なく着手さるるか故に敢て當局より指揮奬勵するの要なきが如きも此の際希望する處は礦業家が不屈の精神を以て今日の好景氣に乘じドシ〳〵經營せんことと是れなり我國にては二三鑛山を除けは他は概ね小資本小規模にして殆んと見るに足るものなく小資本なるか故に前途好望の礦山をも中途にして廢棄するの止むなきに至るもの多く隨ゐて此の種事業家の企業心を挫折すること尠なからず左れば鑛業家は相當の準備と用意の下に不屈の精神を揮ひ此の種事業に向つて續々着手經營せんことを望むと因に明年度に於ける鑛山監督署經費は稍や增額されたるを以て之れが出願者に對し從來より一層敏活に處置するを得便宜を與ふること多かるへし

●萬國青年會大會

來る四月を以て東京に開催さるる萬國學生基督敎青年會大會には列國より夫々著名なる代表者を派遣し各國名士の集合を見る筈なるが就中來會者中にて有名なるは青年會大會本部總長ドクトル、フリース氏(ストツクホルム)幹事ジヨン、モツトル氏(紐育)及米國前驛遞總監ワナメーカー氏等にして尙は瑞典某皇族殿下も來會の筈なりとワナメーカー氏は前回和蘭に於ける大會にて日本及淸國に於ける青年會の爲め私財三十万圓を投すへきを約し我國にては京都青年會に於て右の寄附金を受ることとなり同會々場を京都柳馬場に建築する事とし既に二万圓を以て敷地を買收したるか同建築物は同氏の資に依りて建築さるる筈なりといふ尙大會に要する費用は本部よりも相當の出資あるへきも我國にても及ふ限り會合の盛況を圖る次第なれは是等の費用は大方有志の贊助に待つ處わるへしと云ふ

發行所
清國營口中盛街
滿洲日報社

鐵網珊瑚

歲旦次趙甌北八十自壽韻　藤原周峰

平和克復斂兵塵、又値熙朝坐代春、賀盤鏡湖仙籍客、放翁團扇畫圖人、歲寒松柏推同輩、晴世滄桑話昔因、西洛居然酌椒酒、餘齡仍保薛蘿身。

情致圓足、佳語玉霏、鏡湖團扇、對仗得最警最妙、匪夷所思。

元旦放歌　佐藤六石

賀正車馬何絡繹、朝來紅塵沒紫陌、我隱於市深掩門、盃延靑山作賓客、右梅花、左椒酒、陶然而醉忻然歌、領略春風在吾手、鼎鼎光陰徂、紅顏忽白首、百年計只在靑樽玉壺前、吁嗟乎世間之事竟何有

騰踔刊飛揚、氣往轢古、近代張船山、彷髴相近、使人傾倒

早春漫興　服部擔風

銷夜窩裏倩誰扶、早有乳鶯淸曉呼、拗欲梅花樹綠井、笑揆雪片點紅爐、與來柑酒美風日、春淺江山秀畫圖、好與漁娃買舟去、煙波一棹剗前湖

渾然無迹、足稱逸品　挼碧山房主批

御題

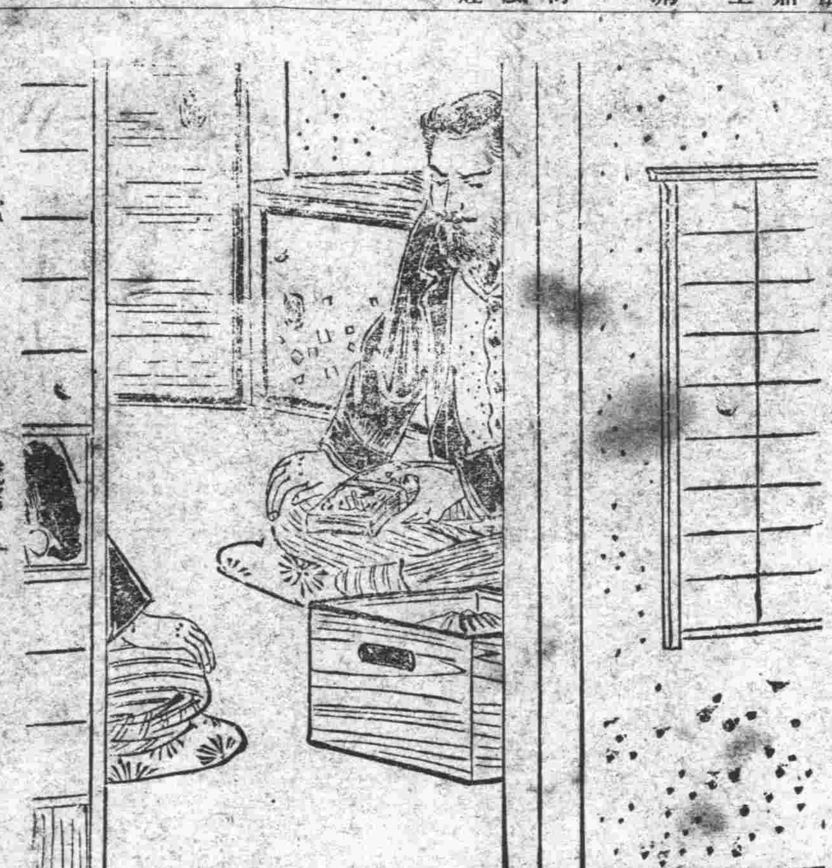
明治丁未試筆や松を自畫自讚　紹波
初日の出御園の松の頂上より　半白
はつ東風や秋津島根の磯馴松　禾乃
萬歲や松は芽出度う映ひける　千曲
蓬萊やたとはヽ松は鷹はしら　甫人
年こヽに松あるかたを惠方哉　鼎庵
讀やすき御題の松をおらか春　野梅

當世 紳士氣質(四十一)

梅葉山燭

絹川は立上つて、かたへなる机の抽出から紙入を出して。『考へて見りやア、何うやら、僕よりは君の方か好い腕らしい』『イヤ、然うて無いです』と樓堂は笑ひなから。『君は未た後か利くか、僕は二百五十圓きりですからなア』絹川は金を渡して。『甚た少いです、まだ最う少しうまい事かあつたら君にも後か利くやうに爲ませう』君か後か利くやうなら、僕にも幸福てすからなア」

樓堂は受取つてポケツトに入れて。『何分お願ひ申します』と云つたか、此奴、生意氣な事を云ふな可らう、くれると云ふなら望み通り、取つてやらう、と思ひなから。『然し、今明うちには動員令てせう』絹川は眞面目になつて。『然うだらうと思ふです、今日まで來ぬのが不思議に思つて居るです、次手に君の新聞へ何とか願ひたいもんですねえ』『二百五十圓赤十字社へ寄附したと書きませうかへへへ』『まア何とか願ます』『はア、何んとか書いて置きませう』馬鹿野郎、未た俺を新聞記者と思つて居やアかるか、血の廻りのわるい男たと、內心打笑ひなから。『何れまたお目にかかりませう』と此下宿を去つた。



二百五十圓の金をポケツトにして、樓堂は家に歸るを、待たして置いた芳太郎に會はう爲め、二階へ駈け上かつた。『何處へ行いつたのだい』と芳太郎は聞く。『何、絹川の處へ行つて來たんた、ね君、僕の察しの通り、まだ如に召集はかかつて居らんのたか、今日か、明日は來るたらう、それにしても、五百圓は多すぎるから、半分貰て來てやつた』と其紙幣を出して。『弱ものいぢめを爲るやうて可哀さうたけれと、これも檢部の懷から出たんた君も金か入用たらうから、取つて置きたまへ』と芳太郎に渡す。『イヤ、僕はそんなに金はいらん、下宿料と小使さへあれは澤山た』と云ふを、無理に芳太郎の懷へねぢ込み、「まア、金はいくら有つても足りぬものた

君には未た話さぬか、僕は君と日比谷て會つた時ね、あの時秋村へ嫁に行つた雪子から、千兩金を貰つたんた、僕の方には未たそれかあるからね、これは君か取つて置きたまへ』『千兩』と芳太郎はいたくも驚いた、何故、雪子から樓堂か貰つたのかと思つたのである。『ああ、それは口止金さ、雪子は、秋村へ行く前に疵者になつて居たんたよ』『然うか』成程、自分に指輪をくれた程の女た、疵者てあるとは無理は無いと芳太郎は譯を知らぬから考へた、これも無理は無い。『然うして誰ない相手は、無論君は知つてるたらう』『知つて居るとも、けれと、これは、君の敵討か濟むまて秘密にして置かう、それてないと口止金か役に立たなくなる、へへへ、けれと、それか、爲めに、雪子は君に心あつたのを捨てて秋村へ嫁ツたのたから、それたけ君は承知して居たまへ』『ふむう、何んだか解らぬか、まア可い、それよりも困ツたなア、おきんの行衛か知れないう、これさへ知れれは、もうメたもんだけれとも』芳太郎は樓堂のすすめに依ツて、昨夜、下谷の待合て、絹川の情婦糸吉を招び、おきんの行衛を探ツたのであつた、けれと更に要領を得なかツた、絹川か行つても糸吉か來られなかつたのは此爲めて樓堂は、おきんを探すのと、絹川の金をへらさぬやうにと、二股かけて芳太郎に招せたツた。『まア待ちたまい、然う急ぎたまうな、其內には吃度探し出せるさ、それより雪子「もう雪子の事は止したまへ、それよりか「先刻、光江かね、今度の戰爭に就いて赤十字社へ寄附する爲に、兩國の白鬧亭て琴の會かあるので、誘はれたから、是非出たいか、兄さんから話したれと、然う云つて居たよ。『然うか、それは出るか可からう』『その會の發起人にね、秋村雪子と云ふ名かあつたよ』『それみたまへ、君こそ云ふじやアないか』『へへへ、イヤ然ら云ふ譯しやアない』

特別廣告

廣告

一月一日に限り爲替貯金受拂事務の取扱を休止す

明治四十年一月一日
牛莊郵便局

社告

滿洲日報は例に依り年頭三ケ日を休刊し五日より發行すべき筈なれども當日は新年宴會、翌六日は日曜日なるにより本社は此期間を利用して滿洲日報發展の一部として計畫せし新市街に於ける新築家屋への移轉を實行せん爲め斷然一月七日まで休刊し一月八日より發行すべし而して新市街移轉後の紙面は更らに一層の刷新を加ふる筈なるを以て今後の滿洲日報は改曆と共に大に其面目を一新すべし

支局新設

本社は別項の如く今回新市街に於ける新築家屋へ移轉する事となりたるを以て此機會に於て益々社務を擴張し新たに各樞要地に支局を設置し讀者諸君の便宜を謀ると共に通信報道の上に更らに一層の機敏迅速を期せんとす、支局設置の地左の如し

遼陽　西門外遼司乙第百卅九号　遼陽支局
奉天　大東門內盛京時報社內　奉天支局
鐵嶺　西門外四十六号　鐵嶺支局
安東縣　安東縣新市街　安東縣支局

恭賀新年
四十年一月元旦
滿洲日報社
社員一同

[illegible]

東京電報

●開院式勅語（廿八日發） 本日帝國議會開院式を擧行し天皇陛下には親しく貴族院へ行幸あらせられ左の勅語を賜はりたり

朕茲に帝國議會開院式を行ひ貴族院及び衆議院の各員に告ぐ帝國と訂盟列國との交際益々親良を加ふるは朕深くこれを悅ぶ朕は國務大臣に命じて國力の發展と國防の充實に必要なる計畫を定め之れに基きたる明治四十年度豫算案は各般の法律案と共に議會の議に附せしむ卿等能く朕が意を體し和衷協贊の任を盡くし以て朕が望む所に副へよ

●直訴を企つ（仝上） 議會開院式終りを告げ、天皇陛下御還行の途に就せらるるや職工體業なるもの直訴を企て突然御簾に近つき奉りしも警護の爲めに捕へられ目下取調中なり

●皇族及將官行賞（三十日發） 本日皇族及び陸海軍將官百六十六名行賞發表され皇太子殿下は功三級に敍せられ、大山大將は功一級に敍し菊花頸飾りを賜はり各軍司令官は功一級旭日桐花大綬章を東郷大將は功一級大勳位を片岡上村兩中將は功一級勳一等旭日大綬章を授けられたり

雜報

●教育會議經過（澤柳文部次官談）

文部省に於て今回開會の高等教育會議に提出したる諮問案は總て九件なるが其の◎第一諮問案は小學校令に關する事項にして義務教育の延長は其の骨子となり居るなりこの案の委員會にて質問の重なるは費用の点なりし此の費用に關しては文部省にても充分調査を遂げ八十万圓の增加あるを認めたり是れ以上は各町村の任意にて增加するに至るやも知る可からす左れども文部省にては如上の增額にて實行し得るものと信せり委員の一人より實施期延長の動議出でしが多數は原案の期を以て適當と認めて之れを可とせり只第五項の小學校學級數の制限を廢し學級數に依り制限を加ふるてとの一項を削除したるが此の項は曩に全國聯合教育會が諮問案として提出し其の決議を採用せるものなるが本會議は之を否認せり◎第二諮問案（高等女學校に關する事項）は市に於て高等女學校を設置する場合費用の爲め區を設くるを得せしむるとの一項は委員會にて削除し本會議も亦此の削除を是せり其の理由とする所は高等女學校教育の如き統一の必要を唱へ居れる[illegible]校に限り變則的に區の設立を許すは不可なりと云ふに在り[illegible]の修正に對し文部省は[illegible]には高等女學校は小學校の如く[illegible]的教育なれば之れを區立と爲すも敢へて不可なしと認めたるまでにして且つ其の關係とても目下に於ては東京、京都、大阪の三市の外にあらされはなり◎第三諮問案 官立醫學專門學校に關する事項は單に時間割の修正あるのみ其修正とても時間的のみにして大體に差違なし◎第四諮問案 假名遣に關する事項は委員會にて可決せられたるも未だ本會議に附せられず隨て其の運命は未だ知る可からさるも要するに委員會に於ては其會の如き國体毀損論を提出するもの一人もなく却て原案の口語體のみに適用すとあるに對し寧ろ進んで文章体にも之れを及ぼさゞるやとの詰問を受けたる程なりし◎第五諮問案 中等教員檢定に關する事項は未だ本會議に上らさるも或る一派の人々は私立學校撲滅案なりと非難するものあり是れ併しながら本案の精神を知らざる誤解なり本案によりて無試驗檢定の特權を奪はるるは官立の大學を始め專門學校、公立學校皆な一律なり何ぞ獨り私立學校と云んや◎他の二案 即ち第七農業學校補習科に關する事項、第八實業專門學校專攻科に關する事項、第九札幌農學校及び實業專門學校に關する事項の如きは輕易明瞭なるが故に讀會省略にて可決せられたり

●內地雜信

▲萬國陸海軍會 明年米國バーヂニヤ州ゼームスタウンに於て開設せらる可き萬國陸海軍祝賀會に對し海軍より艦隊派遣の計畫あるとは既報の如くなるが陸軍よりは日露戰に最も緣故深き將官及一個大隊內外の代表部隊を派遣する由にて將官の人撰は猶未定なるも代表部隊として派遣さるゝ光榮ある軍隊は多分近衞師團より撰拔する事と爲る可しと云ふ

▲稅制の根本的改革 大藏省の稅制調査會は現行稅法の範圍內に於て多少の整理を爲すに止まり稅法の根本的改革を爲すの目的に出でたるものにあらさるを以て如何に整理を加ふるも財政上の缺陷は補修するに由無く、今後戰後經營の益す進行するに從ふて、財政上の缺陷も愈よ著大となり到底現行の稅制にては今後の財政に應ずる[illegible]に起らざるべし、最早斷然根本的改革に着手せざるべからずとは政府當局者の意見にして此の稅制調査は[illegible]なるか進步派の[illegible]を看破して一歩を先んじたるものなりと云へば、本年の議會に於て或は政府より根本的調査案を提出するに至るやも知れずとの事

▲新設の領事館 當初新設領事館として豫算に要求せられたるは本館分館合せて十數個所に達し其の設置地も清國の南北及び南米地方に定まりしが削減の結果遂に本館四個所分館三個所と確定し外務省豫算中に計上さるゝこととなれり而して右館の新設地は哈爾賓、長春、吉林の三ケ所にして他は未定なるも多分滿洲里に定まるべしといふ

▲師團建設費 增設六個師團の建設地に關しては陸軍當局に於て交通、經濟等其他諸般の事項に就き今後愼重なる調査を遂げらるべく確定の上は豫算成立を竣つて發表せられ且つ同時に既定の簡條別を更正せらるへしと

▲艦艇補充計畫 艦艇補充基金を以てする七個年の製艦計畫は如何なる艦種を幾隻建造し且其工事の順序等總て之を知るを得されど豫算成立の上自から明年度にも入らば徐ろに一部材料の蒐集に着手し適當なる時機に於て所定の工事を起さるへしと因に本年度內別に新なる起工を命し又は材料を蒐集すべき艦艇一隻も之れ無しと云へり

▲樺太島の裁判所 司法省にては本年度より樺太島に地方裁判所及び二個の區裁判所を設置することゝなり仝省は[illegible]費として追加豫算に四十五萬圓を要求し目下大藏省にて査定中なり

▲信用業務に對する罪 現行刑法は「商業及び農工の業を妨害する罪」と題し六ヶ條の規定を設けて農商工各業者の業務を保護することゝなり居れるが改正案は右の規定を全部削除し之に代ゆるに「信用及び業務に對する罪」を題して一般の商工業者を妨害するものを罰する規定を設けんとせり右は刑法改正案中の新なる規定なれど委員中には反對者少からずと

▲遣米艦隊の組織 來春遣米さるべき艦隊は目下吳工廠に於て武器搭載中なる新艦筑波及び橫須賀工廠船渠に入渠修理中なる艦伊吹並び千歲艦の二隻中より二隻選定せらるべく該艦隊司令官の如きは既に內定し居る由

▲香料輸入稅全廢 戰時稅法制定の際に規定されたる香料輸入稅は世上少なからさる反對あり曩に政府は之が稅率に就て議會中なりしが今回之を全廢する事に決し本期議會に提出すへしと

▲府縣會の不穩 戰後各地方共に新規に事業を經營するに至り殊に各種學校の新設給水土木費道路開鑿橋梁の架設修繕等を始め產業獎勵費の歲年度に於ける膨脹は著しく各府縣共に縣會を召集して該案を議しつゝありしか孰れも不穩にて議場にて紛擾を釀しつゝあるが[illegible]したる者は千葉群馬滋賀の三縣のみなり

▲郵便料遞減案 遞信省は通常郵便物、小包郵便物及書留郵便物の料金を約一割方遞減する豫定にて今期議會に郵便法改正案を提出する筈なりと

▲郵便切手帖發賣 遞信省に於ては今回內國郵便及外國郵便の用二種の郵便切手帖を發賣することゝなり近々其の發賣期日を發表する由なるか內國郵便用は三錢切手十八枚、一錢五厘切手三十枚を一冊として金一圓、外國郵便用は十錢切手十八枚、四錢切手三十六枚、二錢切手十二枚を一冊とし三圓五十錢なりと

叱石成羊

●鴨綠江の架橋 安奉鐵道と朝鮮京義線との聯絡を圖らんか爲め安東縣と義州との間に鴨綠江に大鐵橋を架設せんとの計畫に關し日本政府と滿鐵會社との間に協議中なりしが同計畫決定を見るに至り其の中洲に築堤し其の東縣に近き部分は之を滿鐵會社の負擔とし義州に近き部分は統監府之を負擔する事に決したる由右費用は約三十萬圓にして統監府豫算に計上しある由

●新市街行政委員 新市街地は都督府令を以て行政委員を設け居留民團の如く之を組織し其の委員の任命は[illegible]警視の[illegible]に依れば民政署長は都督府の[illegible]如く警務署長は[illegible]該府令に依れば民政[illegible]なるが政府と居留民との間に介在して行政執行の責に任するものなり。

●遼陽の新年祝賀會 遼陽にては本月[illegible]日午前[illegible]新年[illegible]を開き[illegible]

三日には[illegible]莊佛教同年會の例會を開く由

●本派本願寺 [illegible]

●松茂洋行の移轉 西北街河岸通の松茂洋行は新築中なる新市街の社宅落成せしに付同所に移轉せり但し店務は從前の[illegible]倉庫に於て取扱ふ由なり

●遼河の電話架設は愈々實施に決し其筋にては舊職員既に加入者募集に着手せりと

●營口測候所移轉 營口測候所は去三十日牛家屯へ移轉せり

●牛莊倶樂部ニウヤスボール 當地牛莊倶樂部員等は昨夜午後九時頃よりアッセンブリーホールに於てニウイヤアスボールを催せし由因に仝倶樂部は來三日午後三時より新ホールにて小兒新年會を開く由

●護岸工事の破壞 豫て軍政署に於て設計竣工せし遼河護岸工事の中牛家屯停車場下手にて此程約五十間斗り崩壞せるが右に付き當局者の語る所によれは該場所は宛も遼河の屈曲點に位し尤も水勢の甚だしき所なるに加へて流水の壓力にて護岸の基礎となり居る地盤以下の地面を抉り取りたる爲め遂に今回の崩壞を見るに至りたるものにて全く天災と云ふの外なき有樣なり現に崩壞場所の深さか杭の根より四尺位も一面に卑くなり居るに見るも其の勢猛烈なりしを見るに足るへしと云々

●滿韓其他在外壯丁の注意 韓國及露領沿海州、薩哈嗹島、淸國香港及廈門に在る者は帝國渡航者と同しく從來徵兵猶豫の特典を有し居りしか前期議會に於て改正の結果該改正徵兵令發布前の在住者は優先權により依然其特權を有するも其後の渡航者は全く此の特權に浴する事を得さる事と爲りたり然るに昨今是等地方在住者にして其徵兵猶豫願出手續に就き種々照會し來りたる向き少からさる由なるか右は徵兵事務條例第五十五條により願書は在留地所轄の公使又は貿易事務官の證明書を添へ三月一日迄に聯隊區若くは警備隊區司令部に願出へき者なりと

●新任領事の着任期 新任領事久保田文三、[illegible]氏は愈々本月中旬頃着任の由にてこれと仝時に瀨川領事は一先阪京の豫定なりと云ふ

●營口舊友會 日露戰役以前より當市に在留せる加川、松倉、深見、廣瀨、酒井、田村、庄村諸氏の組織に係れる舊友會は去る二十九日午後七時より金城館に會合して例會を催したるが當日の出席者は前記諸氏を併せて十六名なりしと云ふ

●本願寺の日曜說教 永世街本願寺にては來六日午後一時及び仝七時（營口時間）の兩回に本年初會の日曜說教を開き寺本布教師

●給水車運送の請求 當地新市街は道路保全の爲め從來支那荷馬車の通行を一切禁止しありしか之れか爲め市內の給水車までか新市街を迂回せさる可らす給水上不便尠からさるを以て特に該車に限り通行を許されたき旨昨日營口厘金局長より我領事館へ交涉ありしと云ふ

忙中閑筆

●營口は開港地だけに俗氣の多いことは、そうと內地の[illegible]のやうであるが、唯だ豪傑紳士の多く集つて居る所だけは橫濱などで死しも見ると[illegible]▲第一に瀨川領事からが稀物と先に杉野書記生が送別會を山金で開いた時も、持て佐藤、松倉、佐藤及び僕などを招き、惡友の顏揃たといつて欣び、僕の行いた時などは、サア惡友會の會長が來たと怒鳴つてゐた、僕が會長なら、領事などは無論總裁たらう▲領事の惡友の解釋が面白い、むかしから自ら稱して惡と云ふもに惡はない、惡七兵衞景淸、惡源太義平などを以て之れを證すべしだとサアしかし惡源太の[illegible]やうに僕とは感服しないな▲三[illegible]の晩餐會に五六の惡友が寄合つた時卓上の談に興ひたが近頃領事は松茂の武石君を馮麟閣と綽名し、僕を杜立山と綽名し、頻りに吹聽しておるとのこと咋日の惡友は今の馬賊、いやはや恐れ入つた次第た▲むかし武石の馮麟閣は好く出來た、身材雄偉にし、目の光つた、顴の張つた具合は骨相さながら馬賊の統領で、過日風邪に罹つた時なども、發度三十九度といふのに、頭に氷嚢を載せ、湯豆腐を前に置いて、あぐらをかき、阪田の金時のやうに眞ツ紅な顏して、舌鼓を鳴らしつつ、頻りに杯を傾けてゐたさうなが、之れを瞥見した我社の一記者は、膽を潰して逃げ歸り、其狀宛かも豪賊の山塞に宴するが如しと漢文句調で評してゐた、もし夫れ僕の如き靜穩無事のもの捉へて杜立山と綽名するに至りては頗る冤た、しかし黑澤稅司が他人の事ばかり素ツ破拔いて、自分の事を棚に上げて置くのは馬賊の德義に於て濟まないと忠告するから、兎に角披露だけしまい▲郵船の佐藤君、これは惡友中の論客た、談辯雲の如く、議論風發し、飲中欠くことの出來ない人だが、五六日頃歸裝を理めるとのこと▲領事館の片山浩然こは隱て御馴染の酒嗹大王である、先日法廷に某件の裁判をした時、支那人が例の辯巧で私は生きて居られませぬから、もう死にますと口說き立てたので、女々敷ことが大嫌の浩然先生、聞て忽ち兩眼を瞋らし、貴樣のやうなものが一疋や二疋死んだからとて天下の大局に何等の關係も及ばぬではないか、勝手に死ねと怒鳴り付けたさうな、阿呆と擬り物てはないか、此擬り物も二月頃には歸國するといつてある▲論客、酒客一時に去らば、流石な營口も惡友寂寞の歎を免れまい▲處が今日は元旦だ、此等の惡友も屠蘇の一杯機嫌で何處かで、落ち合ふであらうが、又趣味ある談柄をつくるに相違ない

本號開設在東青堆子新福南木廠發賣四十二尺三十二尺十六尺八尺梧木方料梧木元杆梧木板片二十四尺廿七尺等松方料並發出售

火神廟街 會席御料理

世傳外科

を號勸業貯蓄債券（五圓券）發賣 前回分は既に賣切の爲再び到着仕候間至急御申込被下度候

一木一石

宮崎來城

一

陸雲人を見れは輙ち笑ひ、阮籍途に窮すれは輙ち哭す、兩人をして相遇はしめんか、一哭、一笑、必す觀るへきあらん、然れとも陸雲の笑ふは癖に非さる也、諷諧のみ、阮籍の哭するは狂に非さる也、悲憤のみ、天下笑ふへきの人既に少からすして、哭すへきの事も亦多し、われ安んぞ得て兩人を今日に起して之れを哭し之れを笑はしめん、然れとも唯た其今日に在りては笑ふも得す、哭するも得さるを怕るゝのみ。

二

余か知る所の某氏の母、女を嫁せしむるに臨み、之れに勅へて曰く、汝夫家に到らは慎んで好事を爲すてと勿れと、女曰く、好事を爲さすんは、惡事を爲すへきか、母曰く、好事猶は爲すへからす、況や惡事をやと、此母の學問は、老子大ひに近し。

三

むかしは張商英無佛論を作らんと欲し、終日一字を成さゞる也、妻問て曰く、公、平生文を作るに、紙を展ぶれは、萬言立ろに就る、今何の文を作るに、其苦しむてと此くの如き、張か曰く、無佛論を作らんと欲す、妻笑て曰く、すでに無佛といへは、此れ佛なき也、何の論すてとか之れ有らんそ。願ふに此妻も亦彼の余の知る所の某氏の母の類か。

四

荊釵記を讀むに、王十朋か其妻錢玉蓮を江上に祭るの文を取む、其文に云ふ、妻阿、妻阿、如ニ一似巫山一片雲、秦嶺一堆雪、閬苑一枝花、瑤臺一輪月一、到ニ如今一雲散雪消、花殘月缺と、其筆極めて簡潔の致ありて、餘情も亦多し。

五

杭州の市語に、一を憶多嬌といひ、二を耳邊風といひ、三を散秋香といひ、四を思鄉馬といひ、五を誤佳期といひ、六を柳搖金といひ、七を砌花臺といひ、八を霸陵橋といひ、九を救情郎といひ、十を舍利子といふ、此れ憶と一と音相近く、耳と二と音相通するか爲めにして、散の三に於ける、思の四に於ける、誤の五に於ける、柳の六に於ける、砌の七に於ける、霸の八に於ける、救の九に於ける、舍の十に於ける、皆な此例也、また吳中に在りて折字法を以て數字の捷名と爲し、以て市語に充つ、即ち一を旦底といひ、二を斷工といひ、三を横川といひ、四を側目といひ、五を缺丑といひ、六を撤大といひ、七を毛根といひ、八を入[illegible]云ひ、九を未丸といひ、十を田心といふ、此れ旦字の底は即ち一にして、工字の中間、一畫を斷ち去れは即ち二の字と爲るか故也、横川、側目以下、此例を以て之れを推せは、復た余か解説を待たすして、自ら了了するものあらん、中にも四の側目、七の毛根、九の未丸のごときは、殊に面白く、之れを我邦のゲンコ、キワなといふ市語に比すれは、義理明白にして、風趣も亦多し。

六

賈島の詩に云ふ、坐聞西床琴、凍折兩三絃と、極寒の夜、往往此事あり、其取趣の微細なる、譯して以て俳句と爲すに足らん、予嘗て之れを試み、沈思すること一刻、遂に成らさる也、一日、夜すてに深し、偶ま鼠兒あり、來りて琴に上る、鏗鏘の音聽くへし、予以爲らく、是れ也、亦詩趣多しと、因て十七字を得たり、云ふ、春の夜の琴踏み鳴らす鼠かな。

七

杜樊川か汴河解凍の詩に云ふ、浮世恰似氷底水、日夜東流人不知と、感慨甚た深し、他人知らさるの喩を氷底の水に取りたる趣向、特に奇警を覺ゆ、古歌に云ふ、我袖は潮干に見えぬ沖の石の人こそ知らね乾く間もなしと、亦同工異曲のもの、ともに絕調也。

八

居士の稱、禮記及ひ韓非子に出づ、必すしも佛語に非ず、道藝處士を謂ふ也、然るに後世に及んでは、婦人にも亦此稱を用ひしもの有り、明の孟賢に侍姬あり、辨慧にして書を知る、孟賢苦吟夕々、遺亡する所多きも、姬は輙ち能く之れを記す、號して梅花居士といふ。

九

宋の時、才媛名士の捷對を以て相諧嘲し、藝苑佳話を後世に留めたるもの極めて多し、吳僧贊寧、頗る儒書を讀み、博覽强記、辯辭縱橫、人能く之れを屈する莫し、時に安鴻漸といふもの有り、文才儁敏、尤も嘲詠を好む、嘗て街に行き、贊寧か數僧と相隨ふを見、指し嘲りて曰く、鄭都官不レ愛之徒、時時作レ隊と、贊寧聲に應し、答へて曰く、秦始皇未レ坑之輩、往往成レ群と、けたし鴻漸か言ふ所は、唐の鄭谷か詩に、愛レ僧不レ愛紫衣僧とあるより出づ。

晏元獻公、人と爲り豪俊にして、至る所賓客を延き、一時名士、多く其門に出つ、幕下の二人王琪、張亢、亢の肢體は肥大なるか故に、琪之れを目して牛と爲し、琪の骨相は孤瘦なるか故に、亢之れを目して猿と爲し、此を以て自ら相譏誚す、琪嘗て亢を嘲りて云ふ、張亢觸レ墻成ニ八字一と、亢聲に應して云ふ、王琪望レ月叫ニ三聲一と、一坐之れか爲めに大に笑ふ

蘇東坡の少妹、前額頗る高し、東坡嘗て之れを嘲りて云ふ、未レ出ニ庭前三五步一、額頭先到ニ畫堂前一と、少妹即ち聲に應して云ふ、欲レ叩ニ齒牙一無ニ覓處一、忽聞ニ毛裏有ニ聲傳一と、此れ東坡か鬢髯の深きを嘲りたる也、また其額の長きを嘲りて、去年一點相思淚、至レ今流不レ到ニ腮邊一といへるかごとき、孰れか奇警ならさらん、亦少妹の機鋒を推想すへきのみ。

十

唐の李白、嘗て時相に謁する時、一板を封し、上に題して云ふ、海上釣鰲客と、相乃ち問ふ、子今鰲を釣るに、何物を以て鉤線と爲すそ、曰く、風浪を以て其情を逸し、乾坤を以て其志を縱し、虹霓を以て絲と爲し、明月を以て鉤と爲すと、相また問ふ、何物を以て餌と爲すそ、曰く、天下義氣の丈夫を以て餌と爲さんと、相ために竦然、余笑て曰く、李白は眞に狂生也、此等の餌の如きは、魚蝦と雖も亦嘗さに食はさるへし、況や海上の巨鰲に於てをや。

十一

佛氏に三戒あり、曰く貪、瞋、癡、曰く淫、殺、盜、此れ眞に佛氏の戒か、孔子も亦嘗て之れを戒む、其言に曰く、君子三戒あり、年少の時、血氣未た定らす、之れを戒むること色に在り、其壯なるに及んでは、血氣まさに剛し、之れを戒むること鬪に在り、其老ゆるや、血氣すでに衰ふ、之れを戒むること得に在り、もけだし色は癡に始まりて淫に極まり、鬪は瞋に始まりて殺に極まり、得は貪に始まりて盜に極まる、人能く孔子の戒を守らくれは、即ち立地成佛せん、今の人佛氏に三戒あるを知れども、孔子に亦之れ有るを知らざる也、異なるかな、明の袁中郎また云ふ、睡るの時、血氣未だ定らず、之れを戒むること想に在り、動くの時、血氣まさに剛し、之れを戒むること怒に在り、其久しきに及んで、血氣すでに衰ふ、之れを戒むるてと勢に在りと、此三戒も亦養生の訣と爲すへき歟。

十二

翌朝のてとを明朝といひ、翌日のてとを明日といひ、翌年のてとを明年といへども、翌月のことは、唯だ來月といひて、明月とはいはざる也、之れをいへは、彼の白雲明月、明月岳山等の字面を聯感し、人に一種異樣の感を起さしむ、然らは則ち來月のてとは、果して明月といふへからざるか、然れとも左傳に云ふ、公孫段卒、國人愈懼、其明月、子產立公孫洩と、此に據りて之れを見れは、翌月のてと、何ぞ必ずしも明月といふへからざらん。

十三

錢塘蘇小是鄉親、此句の人口に膾炙せるや久し、然れども此れ唐の韓翃か王少府の杭州に歸るを送る七律の前聯なることを知るものは極めて少し、其聯に云ふ、吳郡陸機稱地主、錢塘蘇小是鄉親と、陸機を地主と爲し、蘇小を鄉親と爲す、其意味に於て何等の差異ある、唯た一は佳人なるが故に、特に餘情の存するものあるを覺ゆるのみ、此れ其前句に記臆せらるゝ以所か。

十四

問ふもの有り、曰く、孔子も亦妾ありしか、孔叢子を觀るに、宰予か楚の昭王に對ふるの語を載す、曰く、夫子、妻は綵を服せす、妾は帛を衣ずと、此に據りて之れを見れは孔子も亦妾ありし也、

十五

明の湯卿謀は善愁の人也、嘗て曰ふ、人生三副の痛淚を儲へざるへからず、一副は天下の大事爲すへからさるに哭し、一副は文章の識者に遇はさるに哭し、一副は從來淪落不偶の佳人に哭すと、余平生尤も這裡の語を好む、

新春雜題

元日や垣根のあらぬ人てゝろ　半百
初ゆめや莊子は南柯俳士富士　同
初日の出南滿洲の平野かな　同
福引や笑ふ人には福來る　稻波
輪飾やおはします野の小徑　古江生
洛外の風に吹かれん屠蘇の醉　同
歌加留多兒の博士も交りけり　同
裏町や家風崩さぬ門かざり　頹白
初夢や富士を挾んで海超ゆる　同
庭に古る石燈籠や注連かざり　一層樓
若水を使ふて空を仰ぎけり　同
鍬初や麥や伸ひし門田かな　同
城壁に沿ふ家並や門かざり　正月
左義長に皺ぬけて行く徑かな　同
山陰に汐待つ船や松かざり　堀內生
鍬初や乳牛放つ柵の內　肱月
萬歲に福相としもなかりけり　同
初日の出望海樓に登りけり　嘉泉
祝はれて帽子に水の雫かな　禾乃
初東風に馬のたて髮吹かれ鳧　同
寺町の杉のたかさよ初からす　二頭
子等興し妻笑ひぬ屠蘇に醉ふ　同
初日の出東國の空懷かしき　望杜
功七級賀い飾りし禮者かな　無一
若水や汲まんとすればはつ鏡　徹醉
萬歲や言葉づかひを改めて　同
追羽子に殿方も來て墨つけむ　夢周
甍こし初日をおがむ都かな　しき女
三太夫樣まゐると誰か懸想文　抱琴子
御降や土の臭ひはおぼえず　同
高麗人もここに來賀す此代の春　市人
初夢や見ましといふも戀心　千曲
今年こそなす事あらんはつ暦　同
美しや追羽子をつく人の妻　鼎庵
心こゝにあらたまる時はつ鴉　野梅

加藤洋行ハ和洋雜貨食料品美術品等何デモ備ヘザルコトナシ

加藤洋行ノ品物ハ正確ナリ

恭賀新年併祈各位萬福

舊年中ハ不一方御引立ヲ蒙リ難有御禮申上候隨テ小店儀昨年末新市街ニ移轉仕リ諸事逐々整頓致候ニ付テハ本春ヨリ益商品ノ種類ヲ增加シ一層其品質ヲ吟味シ而シテ價格ハ能フ丈ケ低廉ニシ卸小賣トモ非常ノ勉强ヲ以テ從來ノ御厚意ニ酬ユルヲ期シ候間何卒舊ニ倍シ御愛顧ノ程奉願上候謹言

明治四十年一月一日

營口新市街　加藤洋行

加藤洋行ハ卸小賣トモ非常ニ勉强スル店ニテ扱モ甚親切ナリ

加藤洋行ノ價格ハ低廉ナリ

謹賀新年

舊年中は一方ならぬ御引立を蒙り難有奉鳴謝候本年も不相變御愛顧奉願候

○販賣品目の大畧左の通りに御座候

○吳服太物洋反物類　○弁京都染物悉皆　○婦人向小間物類一式　○はきもの類　○洋服附屬品一式　○軍服附屬品各種　○玉突臺及附屬品　○碁盤將棋盤　○樂器類各種　○文房具各種　○茶　○布引炭酸水　○炊事道具色々

○疊建具類　○和洋家具敷物類　○室內裝飾品　○大工道具一式　○金物類　○鍋釜其他鑄物類　○油類（白絞・鯨油・馬油・香油・キヤベツ油）　○卷莨（官製・民製及舶來）　○紙類（日本紙・洋紙・間引）　○卷紙狀袋類各種　○瀨戶物類各種

○カバン及柳行李各種　○乾物類　○味噌醬油酢　○罐詰類　○金庫カン〳〵秤外類　○點燈用アセチリン瓦斯　○塗物類各種　○食料色粉及染粉類　○提灯各種及蠟燭　○其外日用雜貨　○清酒白鶴（正味四斗入詰）　○清酒忠勇（正味四斗詰）

○弊店發行の物品切手は御進物用として便利に有之弊店販賣品は何品にても引替又は內渡可致候

○御卸賣は特別割引可致候

○御注文は電話にて御申越あれは直ちに配達可致候

明治四十年一月一日

SS

營口新市街　玉井商店（電話七〇番）

恭賀新年

一月元旦

書籍雜貨商

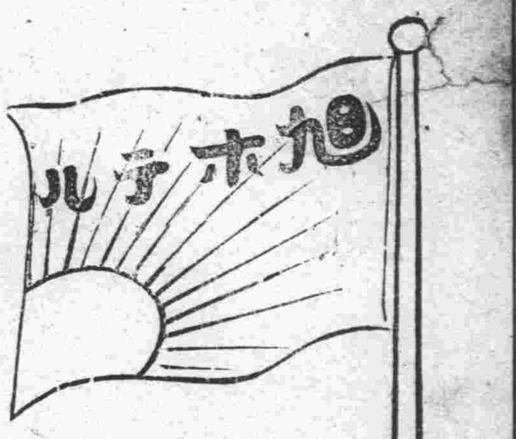
弊店儀改曆と共に從來の賣價を大低減致し候間如何ぞ突飛の廉價にて販賣致候か御來店の上事實に徵せられ倍舊御用命の程奉願上候

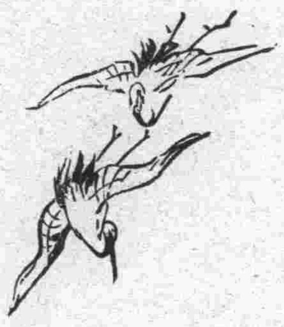
營口永世街　大坂屋號（電話三二一八）

奉天大西門裡大街　第一支店

鐵嶺城裡鐘樓南　第二支店

營口新市街花園街　第三支店（電話百二十三番）



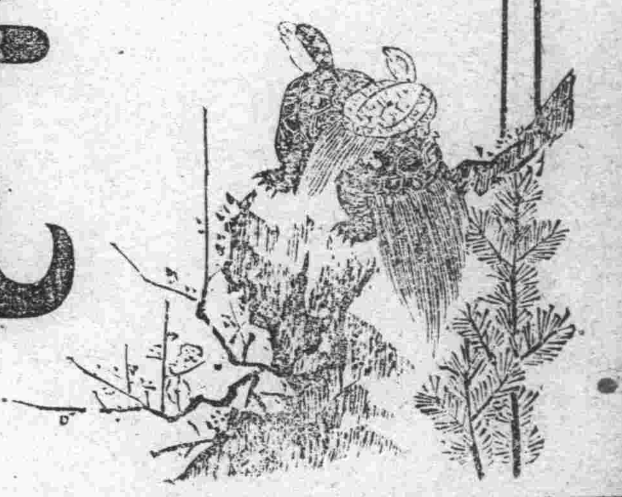


謹賀
新禧

旭ホテル

電話二三五番

營口新市街
六鵜あさ



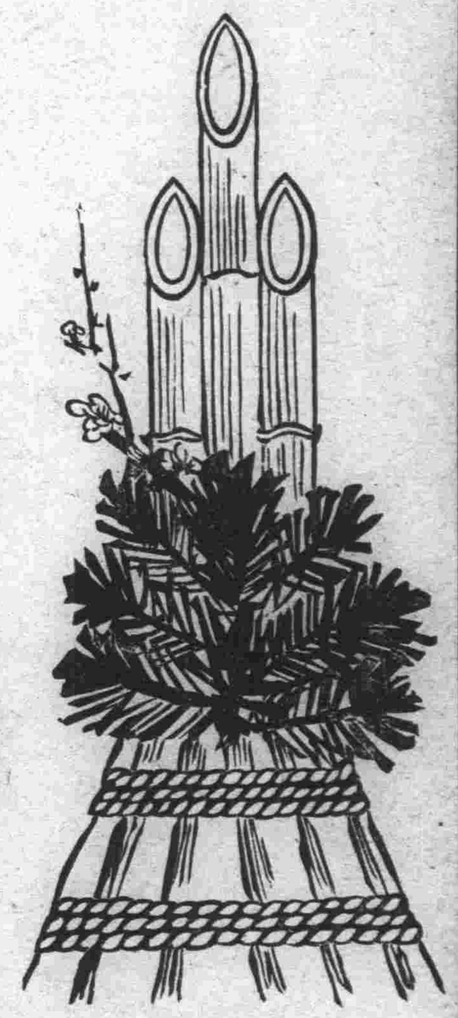
謹賀新年

最上醬油

朝日ビール

營口永世街二十八號
大原洋行
(電話二二二)

營口新市街花園町
大原洋行支店
(電話二三八)



初春の御壽目出度申納候
先つ以て御旦那様方御
揃益々御清祥御超歲
遊され奉賀上候
御陰を以て弊樓一同無事
越年仕候間乍憚御休神
被下度候
偖昨年中は不一方御引立
を蒙り難有御禮申上候
尚本年も相變らず御
愛顧の程伏して奉願上候
先は年始の
御祝詞奉申上度
如此御座候 頓首

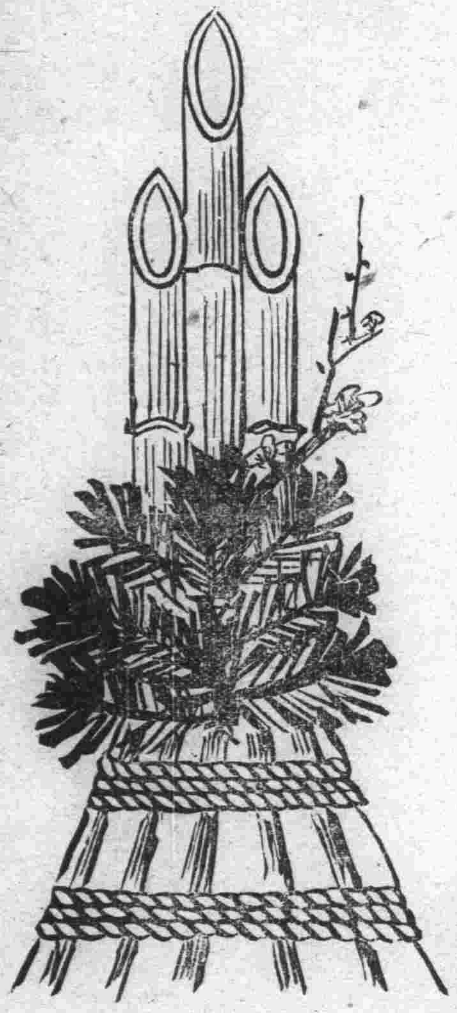
一月一日

第三樓

藝妓
蝶壽 花助 よね 大吉 雪 浪子 艶 柳 うら 彌次 權兵衛 若助 小まん 十郎 五郎 四郎

仲居 一同

樓主 粕谷忠兵衛
支配人 菊田鉢之助 謹白



謹賀新年

營口北本町一丁目
加州組
加州組鐵工部
(電話 八六)

謹賀新年

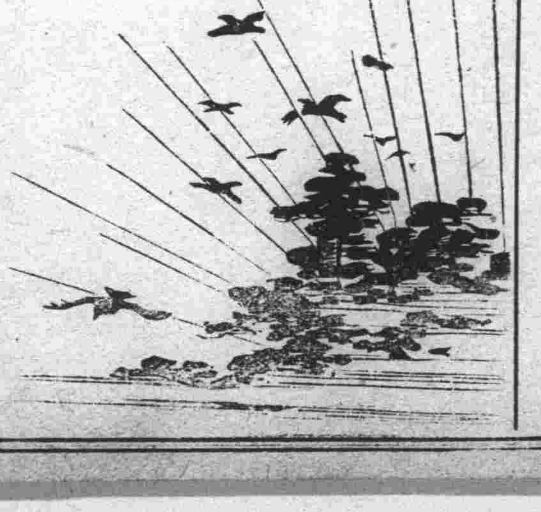
西洋料理 玉突
河岸通り
牛荘ホテル
電話一六六

一ヶ月食料定め
銀三十五圓より仕候

謹賀新年

元神廟街二〇九號
翁亭

新市街青柳街
翁亭支店
瓢亭



謹賀新年

淸國營口新市街第七號
宮崎宗朔
(電話一七七)

恭賀新年

プラチナ
ブロマイド
光澤寫眞
引伸寫眞

營口元神廟街
三船寫眞館
(電一四二)

奉天小西門外大ヽ字街
三船支店

講談

復讐美談 譽れの襷（第八十二席）　桃川實講演

之れを聞いた毛利小平次 小「ハア夫で相解つた、イヤ緣といふ者は不思議なもの、知らず識らず今日里見氏の御息女に面會いたすとは、同藩の好み盡せぬ御緣、如何にも御身の親御は我等の父とは至つて懇意にいたした、私は毛利小左衛門の倅小平次と申す者、兼て父存生中横田右內と爭ひ、夫が爲に里見氏は浪人いたしたか、どうか里見氏を元の通り御召戻しになるやうにと心配いたし居つたが、父は前年殁して手前も江戸表へ參り勤に暇なくてトント外へも出ず、今は寸暇を得て觀世音へ參詣の折柄不思議の所にて御身に面會をいたし御身の志し又重左衛門殿の遺志を承はつて見れば及ばずながら此後惡いやうには至さん心添はいたして進せるから心丈夫に思はるるやう」と聞いて喜ぶお花 花「何分ともに御願ひ申しまする」と跡は四方山の話に時移りました、所へ尋ねて來たのは仲間の勘六 小「オ、勘六か能く分つたな 勘「ヤツ旦那樣、是に在つしやいましたか、觀音の御堂へ參りました處がお在でございません、夫から何か人がゴヤ／＼して居りまするから、聞た所が今是々だといふ事、夫ではテツキリ旦那樣に違ひないと、此方を尋ねて參る途中、餘り吹降りに一寸他の軒下で休んで居る中、存外手間を取りましてございますサア／＼お供いたしませう宜い鹽梅に雨も歇みました、眞正に何といふ氣狂ひ雨でございませう 小「イヤ大きに御苦勞であつた、然らば參らうか」と小平次は、幾らかの金子を取出し 小「さて今日は飛だ厄介になつた、是は甚だ輕少ではあるが、佛前へ線香なりと供へて呉れるやうに」と差置きまして其儘に立歸つた、所が之が緣となつて其後觀音へ參詣の時には、梅本のお花の所へ寄立る事に極めました、扨遠くて近きは男女の中とか申まして、終に此小平次とお花とが割なき仲となつて、其間に一子を擧げ、名前を芳之助と命けました、斯うなつて見ると捨ても置けませんから、奥山の店を仕舞はせて月々の送り物、万事手當をしてどうか親子を引取り、公然の妻にしたいと思ふが何にしろ若年の事でありますから、極りが惡いといふのが先立つて人に話も出來ず、內々にして居る中に愈よ在番の年限が切れて歸國といふ事になり、どうしたら宜からうと一方ならず心配して居るのを、早くも夫と見て取つたのが苦勞人の堀部安兵衛、段段樣子を尋ねると始めて事の次第を打明けました、安兵衛之を聞いて 安「イヤ決して心配せぬが宜い、殊に元御同家の里見重右衛門の娘とあれば猶更の事、親父の彌兵衛と相談をして近くに何とか致すから、必ず氣遣はれぬやうに」と大丈夫に受合ひましたから、小平次は漸く安心をいたして取敢ずお花の許へ參り 小「今度國表へ參らなければならんに就て、堀部殿に委細はお賴み申して置たから、其中に必ず何とか宜い話もあらう、是は當分の手當芳之助の養育料と、相當の心附をして盡きぬ名殘を惜みつゝ、終に國表へ出立いたしました、殘りましたお花親子は、今日は御屋敷から何んとか宜い便りがあるか、明日はお人が來るか知らんと、夫ればかりを心待ちに待て居りました所が、さて安兵衛も種々御用多でございますから、ツイ一日延びに延て居る中に、元祿十四年三月十四日殿中の手違ひ殿樣は當日田村殿御屋敷で御生害といふ御家の大變さあ、安兵衛はお花の事どころではない、其まゝ御國へ發足をした、サア親子の者は一方ならぬ心配、お家は潰れる夫の便りはなし、誰に相談しやうといふ人もございません、只世間の噂を聞くも、淺野の御家來赤穗の城へ立籠り、公儀の討手を引受けて戰爭が始るといふ穩やかならぬ話所が無事に城渡しが濟んで、淺野の家來は皆なチリ／＼バラ／＼に退散をして終つた、之を聞てお花親子はホツと一息胸撫下し、シテ見れば小平次殿もキツト此方へ御出でなさるに違ひないと、只管便りを待てども、梨の礫の音沙汰もございません、といふのは毛利小平次は六十餘名一味連判の中に加はり、若手でありますから京都へ留りまして、小野寺十內、橋出半左衛門、間瀬孫九郎なぞいふ人と共に、終始大石の用を達して居ります、處が大石內藏介が山科へ閑居して此方、打て變つた身持の放埒、初めの內は吉良上杉の間者を欺く計略と思つて居りましたが、日增しに放埒は募るばかり、世間では四足大盡、浮樣など〻綽名して散々の惡評、果は一味の者も大石は見掛け倒しの人物、赤穗退散の時に莫大の金を持て立退いたのは、仇討に就いての用意ではなく、自分が榮耀榮華に使ふ考へであつたかと疑ぐるやうになり、中にも毛利小平次は一層氣を揉み、油斷なく大石の舉動に目を附けて居りまする。

●遼陽花柳盛衰記

花咲ひ柳眠る去年の春頃より遼陽花柳界中に第一と呼ばれて流石に燈紅酒綠の繁華をきはめたる遼陽館も、場所の餘りに東方に片寄り居るはまだしも一時美貌と溫柔高尙と多藝を以て優に情天と明星と仰がれたる〆八孃と御輿を据えて間もなき〆吉孃とは胡沙吹く風を厭ひてか姉は廣島に妹は西京に立戻り幾多の粹士に失望せしめたるを口切りに愛嬌多き二三は勿態なくも滿妻大明神と格式を高め奉り一寸話せた〆子までが他に鞍替したるより紅粉寂寥として客足日に絕え今では遼陽館の名さへ粹士仲間に忘却せられて門前雀羅を設くるばかりなり、されど口八丁手八丁の女將軍が昨今躍起運動を開始し紅裙隊の召集中なりと聞けば又も昔日の繁華を見ることとなるべし、それに就けても幾んど同し名のつく遼塔ホテルは喇嘛塔の下より西門外に移轉し家屋も新築して玉突臺など据え付け娛樂の設備比較的完美せしかば東西南北客爭ひ來りて昨今の大繁昌、十一月の賣上け高が遼陽五十軒の料理店を凌いで第一位を占むるに至れるも決して謂れなきに非ず、それに主人が如才なく萬事に改善を加へ居れば將來は非常なる人氣を聚むることとなるへし、ホテルに次いで繁昌せるは今の藝陽館即ち元の藝陽亭か、亭の一字を館の字に改めたばかりで何んだか格式の上つたやうにおもうも人情ならん、それに黛の綠に粉の白さは孰れも新輸の別品とて浮れ男の目の引き易き三味の音は夜をトして絕ゆる時なく場所又西門外の目貫なれば此れ丈にても粹沽券は落ちざるべきか瀟洒たる裏建の日本式なるも營口以北にては一寸見ることも少し、しかし始終內訌の外に洩れて擬奇珍談の耳に入るは非常なる瑕瑾なり誤用心あるべし、東洋館は第一と第二に分れ第一は城內に第二は城外に在りて、兩つながら可なり人氣、相變らず柳腰花顏の手形多し、女の髮毛は一本にても萬牛を繫ぐといふもの、まして勾欄三四十餘名の艷品が綠れる髮毛を銀杏返しや島田や二百三高地に結び立てて、態を盡し妍を極むるから其勢力の偉大なる、鼻下長連の二次會か何時も此東洋館と相場の定まりたるも亦可笑し、されど大抵は名古屋式とバツテン式にて上品を欠ぎ何んとなく女郎屋的なり例の萬吉、千吉、梅子の三姉妹は宴會ごとに呼ひものとなりて人氣澤山なれど萬吉には百度以上の情夫あるやの噂高し、滿州館は構內至て廣く僅かに大料理屋の門構へなれど客室は狹く二十人を容るるに足るものなく膳部、板公の腕前なと餘りに感服されぬ節多し、されど西京美人のお八重孃は確かに來て秀でて標緻麗はしく其肌の豊なること滿洲第一等なりとは粹士連一致の評定なりとか、要するに同館の出色は美形の潤澤に在りて十數名の阿娜もの愛嬌を振り撒き居れば、客足こそ惡けれ客足絕えず夜々の賑ひ隣壁に聞ゆ（まだある）

緋縮緬被てから嫁のむねさはぎ
一人ものピンといはせて旅へ立
年禮は食ふやりくりをして歩き
醉た翌日女房の眞似ゑ耻かしさ
嫁の禮しきいを越すの八釜しさ
鼻唄はうぬが勝手にふしをつけ
總花に遣手は風邪をおして出る
知る人にばつかり强る子の給仕
新宅は鬼といはれた金で出來
あんにしろ鎌を放せと庄屋分け
假親の出來てまんまと二頭曳き

新春純
[illegible]
中納言

高等麥酒　スペシヤルライト

滿洲一手販賣

本店　營口元神廟街（電話五番）　關東公司
分店　奉天四平街（電話十三番）　關東洋行
分店　仝　小西門內　關東洋行分店
出張店　大阪市江戸堀南通り一丁目　關東公司出張所

恭賀新禧

株式會社牛莊取引所

理事長　磯野良吉
常務理事　松尾鶴男
理事　古門九右衛門
仝　和久伊兵衛
監查役　早川鐵冶
仝　宗像祐太郎

仲買人

長田兄弟商會　長田致孝
福順洋行　土屋熊吉
喜久洋行　幡田義之助
義松公司　松枝順藏
信昌號　小杉佐一郎

●各國境界劃定の先例

志賀重昂氏講演

境界劃定は目下世界の各地處々に實行中若くは未決問題として存す、然れとも之に關する報告とては日本に於て之を得へき便宜殆と無し、夫の六十年間紛糾し明治三十五年英國現皇帝陛下の御仲裁に依り僅に結了せしアルヘンチナ、チリ兩共和國間の劃境顚末も、又夫の十九年間紛糾し伊太利皇帝陛下の御仲裁に依り三十八年五月僅に結了せし阿弗利加に於ける獨葡兩國の劃境顚末も共に當時英國勅立地學協會の雜誌に載る報告に依るの外、詳細なる始終を聞くことを得す「唯北米合衆國とカナダ間の劃境顚末は一部の報告となり居れるか、是れと云ひ是れと云ひ簡と密との差はあれ要するに其劃界のみの報告に止まり世界に於ける境界劃定なるものを總括して論叙せし書冊とては予の淺學なる終に之を見さる所なり、然も余の淺學なるは兎もかく夫の浩瀚なる三十六大冊の英國百科全書にすら一も之に關する記載なき事は其親切詳密なる新版の大目錄中に「境界劃定」は固より「境界」、「國境」なる項すら掲けあらさるを以て之を徴するに足れり、流石にケルチー博士（英國勅立地學協會主幹）は境界問題に付き三頁ラッチエル博士（ライプヒ大學教授）は纔々數十頁の所見を其著述中に記載せりと雖も主として古來境界の發達に付き立論せるものに係り其列擧せる實例の如きも最近年に關するものは殆と之を見す、然れはとて日本の書籍を如何に捜索するも固より開國三千年來陸地を以て境界せしは今回の樺太劃境を以て濫觴とこそすれは日本人の作物に材料を索むへからさるは余か言を俟たさる所、此の如く劃境の材料は內外に容易に索むへからす、然れは今て日本帝國の發展に隨ひ將來各處に境界劃定の事起生すへく而も此題問は今日に當り最も研究し置かさる可らさるものなれは本年五月五日即ち余等か樺太劃境に出張の正一個月前、英國工兵少佐ヒルス氏（阿弗利加に於ける境界劃定に從事せし人）ケムブリヂ大學にて講演せしものに據り其階卑を離へて是より申し述ぶへし

境界の種類　（一）天然の境界、（二）人爲の境界、（一）天然の境界、山河等にて分界するを云ふ

山の境界　山岳殊に分水嶺を以て境界すれは最も宜なりとせは素人には一見此の如く見ゆれとも、此の如き規約に依りてこそチレ、アルヘンチナの二國は最近の六十年間劃境に紛糾したるなり、分水嶺と言ふへきものなれは誰人も當初アンデスの最高嶺線にありと思料したるに探求の結果分水嶺と最高嶺線とは處處に一致せさること明瞭となり、斯くて兩國共に規約書の明文に據り各々對手國の土地にまで深入して其領土を擴張せんとせしこそ紛糾の原因となりしなれ、樺太の分水嶺（ポロナイ及ツイミ二川の）は最高點二一三米突、ポロナイ幹流とツイミ幹流との間は二〇〇米突に過きされは二川の支流中にはツンドラ（泥炭地）より發して其間に殆と高低を見さる處無しとも限らす、此の如くなれは將來山岳を以て境界線とすれは「最高嶺線」とか「分水線」とか各別に明記し何何山脈とか分水嶺とか云へる如き漠然たる文字を用ふるは紛糾の原因となるものと知るへし

河の境界　河を以て境界すれは最も明瞭に且つ安全なるへしと思ふ者あるへけれと甚實最も不明瞭不安全となるものなり、何となれは河は始終水の增減し一方に岸崩れて他方に土沙の堆積するものなれはなり、日本內地にても河の甲縣岸か乙縣の一二個村存在するなとは全く河道の變遷に因るものとす、此の如き倘可なり黃河の如き河道を幾回も幾十百里の間に變化するに至りては河の不明瞭にして不安全なる境界なる事推して知るへし然れは今日までの先例にては河の境界は縱令水の涸乾したりとて當初規約せし河床を以て境界することとし隨て近年は各國共に「河の流域」（即ち水の流るる行路）の字を力めて避くることとせり尚在來一河川の「中流」を以て境界を劃定し居たれとも、既に河道の變化、水量の變化する以上「中流」の字は紛糾の泉源となるを以て、最近年は各國共に河のサールブ（直譯谷路即ち河底の最も深き部分を云ふ）を以て境界することに規約するに至れり何となれは河道の變遷したりとて當初規約せし河床を以て矢張り境界とすれは、如何に水量か變化するも最も深き部分丈けは即ち識別し得へきを以てなり、然れは將來日本が亞細亞大陸に於て河を以て外國と劃境するなとの事あれは「中流」なと言へる舊式の字を用ひすサルウエグの字を用るを可とす

（二）人爲の境界　經度、緯度、直線等、地球上に畫ける想像線にて分界するを云ふ、ては未開未探求の地方を分界するに多く用ふ、然れは阿弗利加、濠太利、新キニー、島なとの分界は此種に屬するもの多く、特に北米合衆國の四十四聯邦、五領土は二州を除くの外何れも想像線に因て分界せられさる處なし、此の如く新開未探求の地方にこそ最も多く應用すれ、而も固と地圖の上に畫せる想像線にして實地に就き眼之を目る能はさるものなれは、固より境界線としては完全なるものに非す、殊に

經線の境界　の如きは英國とコンゴ獨立國と東經三十度の子午線を以て當初劃境すへしと規約するや、實測の結果三十哩も誤謬を生したる例あり、樺太も亦目下現存する各地圖の經度は決して正確なるものと言ふ可らす、故に將來に細密に測量したる上ならては容易に經度を以て劃境す可らさるものと知るへし

地圖上の劃境、地圖に據り未開地を劃境するは甚た不安全なるものとす、現に一八八四年の伯林會議第九規約書中の地圖に據り同年十一月獨逸とコンゴ獨立國との間に締結せし規約第四條は一時に百五十哩の程度を以て編成せし地圖に據りたれは、最近年測量の結果此地圖の根本的に誤れることを明瞭となり、隨て此規約は今や反古となれり

以上の如くなれはヒルス少佐は「爾後外交家は科學的地理家の補助を待つか、然らすんは外交家彼れ自身科學的地理家にしてこそ初めて能く其國家の利益を增進し後世子孫の爲めに其平和を擁護し得へし」と極論せるもの、自ら至理の言なりと許すへし

●鋼鐵王の禁物

近着の米國一雜誌に鋼鐵の事が書いてある中に彼の鋼鐵王カーネギーの話が出て居る起業熱の盛んなる此頃我邦の事業家に頗る有益な話であるから其大畧を紹介する、話に據るとカーネギーは曾て一度も投機的の事を遣つたとなく、又一度も他人の經驗しない事業を自分で始めたとがない、此二つはカーネギーの大禁物とする所で、慈善事業には幾千万圓の金を惜氣もなく寄附する、或は種種の改良發達の爲に數百万圓の金を擲つことがあつても賭の樣なことには只錢を出したことがない、株式取引所へは屢は行くことかあつても同所で株を買つたことかない、そして投機業は實業の僞物てある、人體の滋養分を吸收する寄生蟲てあると常に言つて居る、又何の事業を始めるときにも石橋を叩いて渡るやうに用心に用心をして充分に成功すると分つてからてなくては決して着手しない、人か何事か新しい事業を考へ出すことかあつても、充分に其事か他の人に依りて試驗されるまでは決して手出しをしない、其代り愈よ其事か好いとなると誰も競爭か出來ない程に非常な勢ひで其事を始める、夫れて知らぬ人はカネギーか最初に考へ附いたことのやうに思ふものか屢はあるさうだ、又此事は時勢に後れたものである、之れは古い方法であると云ふことになると、如何程莫大な金を費したものでも直ぐに夫れを放棄する、今から五年程前に彼の製鋼所て工場の機械を改良する必要かあると云ふので、其計畫を開き始めてから三十分の間に從來の機械を棄てて新に二百五十三万弗を支出して機械を購入することに決した、さうして二年の間に二千万弗を其爲に費消した、英國の二青年化學者トマス及びキルヒリストか多量の燐を含んで居る鑛鐵から鋼鐵を造る方法を發見したときに其特許を二十五万弗で買つたことかある、さうして後から又五万弗を贈つて遣つた其時カーネギーか言ふには此二人の青年は英國の爲め同國の諸王か盡したことよりも偉いことをした、モーゼスは岩を打て水を出した許りたか此二人の青年は今まて廢物であつた燐の多い鐵鑛から鋼鐵を造り出したからモーゼスよりも偉い、いくら大金を遣つても吝くないと、カーネギーは世の所謂成功者とは全く反對で人間は正直でなくては成功の出來ぬものと固く信じて居る、實際今日までカーネギーの遣つてことには寸分も不正直の點か見出されないと云ふことである、投機や不正直てなくては金持になれないと思ふ人かカーネギーの財產の千分之一程も金か儲けられるてあらうか

●月世界の溫度　月世界の溫度に就て從來星學者間に種種の說あるやうなか佛國の星學者ヴエリー氏か最近にコスモス雜誌に於て述ふる所に據れは月球の溫度は日々非常なる溫度の昇降あることは確實にして溫度の最も高きときは地球の表面に於て見る能はさる高熱に上ることあり、か兩軸は此の如きときと雖も人類の生活に適する程の溫度なるか夜間は溫度急に冷却して人類は穴の中に入らされは住む能はさる程に寒冷となり最低溫度の所にては攝氏氷點下二百度に降る所ありと

賀正

正月二日三日　特別廉價販賣

清曆十一月十八日十九日　減價賤售

營業概要品目

歐米各種時計類
貴金屬美術品類
眼鏡及双眼鏡類
蓄音器及平圓盤

近江洋行

營口西北街（電話二百〇七番）
大連浪速町（電話四百四十六番）

銃砲火藥散彈及附屬品各種

○建築用金物○土工木工石工具○亞鉛板○洋釘○鎹○

○金庫○円匙○方匙○十字鍬○農具○一分間湯沸器

○清國向扇子各種○ストーブ○木材○

謹賀年

宝

營口永世街

寶圓洋行

（電話三二一番）

恭賀新年

第一改良店安價大販賣

防寒用一切　洋服外套　同附屬品　東コート　メリヤス類　ワイシャツ　船來毛シャツ　船來ライト　船來毛布　流行帽子

長靴短靴　下駄スレッパ　旅行用鞄　同柳行李　毛糸スコッチ　關東御召　濱チリメン類　チリメン頭巾　帳簿類色々　純金指輪

卸部　清國人向き貿易品種々　軍隊用酒保品一切　其他　和洋雜貨澤山　新荷着

●尚本年も相變らず御引立を奉希候

●追て小賣品等は精々勉強を以て內地相場に致升

本店　營口

神崎洋行

●清國の貞女節婦

石樵

忠臣は二君に仕へす、烈女は二夫に改めすとは、支那に於ける女子訓誡の第一義なる此訓誡は儒教ありて以來二千餘年の間、人倫の大本として唱説せられ、實踐せられ、能く之れを守るものを貞女と稱し、節婦と稱し、其名を百世に傳へて、風教を勵ますの資料に供したることは、歴代の史乘の明示する所にして、其事固より大に可也、然れとも細かに其裏面を觀察すれは、其中には純然たる節婦或は貞女なれとも、其心は未た必すしも然らさるもの頗る多し、けだし年少華齡の婦女子の一度ひ鸞鳳分離の恨事に逢着せるものをして、終生空閨を守らしむるは固より容易の事に非す、彼れ支那人も亦能く之れを知る然れとも、其訓誡の第一義は、實に兩夫に見ゑすといふに在るか故に、人情の常として力の及ふたけは、其子女をして貞烈の名に徇はしめんと欲す、然かる後其監督を嚴にし、閨門を密にし、内外の往來を遮斷し、甚しきは則ち亡夫に殉死すと稱し、之に迫りて自殺せしむる者あるを見る、亦慘なるかな、

かの父兄は、何か故に斯くの如く慈愛に乏しく人情を棄てて自ら其子女をして悲酸の地に沈淪せしむるや、他なし、其心、朝廷の意を迎合して、譽れを郷黨に取らんと欲するに在るのみ、けたし彼の朝廷の政を爲すは一に儒教に於ける忠孝の大義を以て基本と爲すが故に、此貞節に對する見解のごときも亦之れより割り出し、竟に以爲らく節婦、貞女は、國の珍、世の寶、風儀を百世の下に維持する所以んなれは、大に之れを奬勵せさるへからすと、ここに於てか、閭巷の間、一度ひ女流の貞烈を以て聞ゆるものあれは、朝廷は故らに官吏を派遣し、其事實を調査して、活ける修身教科書と爲し、婦人の龜鑑と爲し、之れを門閭に旌表せられたるものは祖先の餘澤の存するが爲めに此貞女を出せりと爲し、父兄の教訓の宜しきか爲めに此節婦を出せりと爲し、家門の光榮之れに過ぎたるは莫しと爲し、郷黨の譽れと爲し、比隣相聚りて嘖嘖贊稱し噵くものをして之れを羨ましし、今、古往すでに斯くの如くなれは、其習は遂に風を成し、妙齡の婦女子の新たに匹偶を失へるものあれは、其父兄及ひ舅姑は、女子の意思如何んに係らず、亥も勸めて終生空閨を守らしめ、慘酷なるものに至りては、則ち之れに逼りて自殺せしめ、以て朝廷より旌表せられんことを冀ふ、虛榮心の害を爲すも亦甚し、

論して此に至れは、支那に於ける貞女と節婦とは一に虛僞を以て成れるも、秋毫も取るに足らす却て其憫れむへきものあるを知らん、然れとも彼等は自ら之れを爲して疑はす、唐の時、徐州の張尚書建封に愛妓關盼盼といふもの有り、歌舞に巧みにして風態多し、尚書すでに沒し、盼盼舊愛を念ふて嫁せす、燕子樓に退居して節を守ること十餘年、詩三首を作りて志を述ぶ、詩人白樂天其詩を愛して之に和し、又絶句を贈る、其絶句に云ふ、黃金不レ惜買二娥媚一、揀得如花四五枝、歌舞教成心力盡、一朝身去不二相隨一と、けたし死を盼盼に諷する也、盼盼詩を得て反覆之れを讀み泣て曰く、妾は死することと能はさるに非す、千歳の下我公色を重んするか故に、死に殉するの妾ありたりと爲すものあらは、恐らく我公の淸範を玷けんことを以て妻は死せさりしのみと、因て樂天の詩に和して曰ふ、自守二空閨一斂二恨眉一、形同春後牡丹枝、舍人不レ會人深意、訝道泉臺去不レ隨と、旬日食はすして死す、嗚呼亦慘酷なるかな、關盼盼、一都の賤妓を以て識見の高邁なる、殉死は却て恩公の淸範を玷くると爲し、退て燕子樓に孤棲すること十餘年、將に節を守りて一生を終らんとすれは、此れ誠とに絶代の貞女也烈婦也、何ぞ之れに迫りて死せしむるの必要あらんか、かつ樂天は、當時に於て情の人也、慈愛心のごときも、他に比して至て深かりき、然れとも猶は忍んで此等慘酷の事を爲す習の性を爲すも亦甚し此等の例證を擧くれは唐、宋、元、明る現の間言ふに忍ひさる者盈に今の淸廷に於ても亦之れを見る、昨五月中湖廣總督張之洞の上奏文を讀むに其趣意に云ふ、某處に處女あり、名は某、家人の留守に裁縫しつつありしか近所の惡少年三名、其門に來りて囂囂喧騷し、頻りに石を擲つ某女門を開いて之れを咎むれは、少年等言ふ、汝竊かに情夫を拘引して、現に室内に在り、女子の爲すまじき行也と、因て之れを恥む某女怒りて、曰く、誣ゐるも亦甚し、汝先つ室内に進んで之れを搜索せよと、彼此問答の際、比隣來り集る、少年狼狽し、某女の面を傷けて遁る、某女悲憤し、泣て曰く、妾は妙齡にして此耻辱を被る、何の面目ありて復た父兄に對せんやと、遂に自ら縊れて死す、少年の罪狀は臣當さに、檢覆して大刑に處すへし、某女か一死を以て其身を潔ふするに至りては、必志頗る貞烈也、幸に旌表の恩あらんことをと、今之れを彼の夫婿の亡後、父兄及ひ舅故か、年少の寡婦に迫りて自殺せしめ、貞烈無双として旌表の恩典を乞ふものに比すれは、斯くの如きは、寧ろ旌表の上位に値ひするものなり、然れとも我國の今日に於て、此等の事件に逢着すれは人は、必す一笑に付せん、新聞は必す三面の雜報欄に、氣の小さき女とても題して、輕快なる筆端に五六行の文字を驅使せん、彼我國情に異る所あるに由ると雖、而かも亦支那に於ける貞女、烈婦の旌表か、果して如何なる性質のものかを卜知するに足らん。

夫れ張之洞は湖廣總督也、堂堂たる大官也施政の事、更らに之れより大にして且つ急なる者あるへし、然るに猶ほ刻刻として此等の事を爲す、もし夫れ之れに下れる地方官、即ち知州、知府、知縣の輩か提出する所の旌表請求の上奏文は、毎歲其幾千なるや、殆んと數ふるに遑あらさる也、けたし朝廷の旨趣、すてに貞烈を勵ますに在れは、地方官にして、貞烈の事を上奏すれは、朝廷は唯た其貞女及ひ烈婦を旌表するのみに非す、併せて其地方官を稱し、此れ全く其施政の宜しくして、薫化の致す所と爲し、或は賞を加へ、或は秩を加ふ故に地方官は之れを以て秩を增し、賞を得るの最好手段と爲し、自家施政の管内に一名たりとも多く貞女及ひ節婦を出さんと欲し、他家の不幸は自家の幸、一度ひ少婦の匹偶を失へるものを見れは、極力關渉し、終生寡居のことを父兄舅故に命令すれは、父兄舅故も亦一家一門の光榮を計るか爲めに、相謀りて子女の意思を束縛し、終生改嫁することを勿らしめ、甚しきは之れに逼りて自殺せしむ斯くの如くにして支那の婦女子は、沈鬱の中に、一生を斷送するもの愈よ多く、貴重なる性命を毀損するもの愈よ多し、淸國に來りて、其閭巷の間に見よ、旌表せられたる貞女、烈婦のために建設せられたる壯大なる石華表の、到處に巍巍として聳ゆるものあるを見んこれ皆な憐れむへき妙齡の女子か虛榮を好む父兄と、自利を營む官吏の犧牲に供せられたる紀念碑也、儒教道德の弊も亦此に至りて極まれり、浩歎に堪ゆへけん耶。

●世界一の硝子橋

賴山陽か天下の絶勝と誇りたる耶馬溪を幾百倍にしたるコールカルゴー溪といふは北米合衆國はテキサスの沃野を横ぎりミシシツピー河に入るアルカンサス河の上流にあり玉の如き淸水湧き出てて七里の間相對する兩岸削れるか如き絶壁數千尺の下に巖を嚙み巖を呑み走りては瀲み流れては迸る溪流の偉觀誠に全世界第一の奇勝と云ふ可くヨセミテの雪の眺めゴールテンゲートの夕映の景色と共に亞米利加人の誇となり居たりしか不幸にも地の餘りに峻嶮にして攀づるに難く下るに怖ろしき幾重の山に閉ち籠められ遂に觀光の客を容れさるを遺憾とし程近きカンヨン市の電氣鐵道會社にては此程茲に到る遊覽鐵道の敷設を思ひ立ち初め斷崖の裾に當る廣地に軌道を設けんとせしも狹隘にして工事に困難なるのみならす堂堂たる水流の時に襲ひ來るの虞あるより中途より設計を變じて斷崖の中途を削りて軌道を作る事となせしに意外なる障害現はれたり何ぞと云ふに斷崖の流に沿ふて行く七里の間に一峽ありて三百三十呎の空隙をなし鳥ならでは翔り得ざる事となりしより同會社にては折角の事業を此か爲に中絶せん事を嘆き百方苦心の結果茲に技術上の記錄を破るの大計畫を爲し此程工事に着手したりと今其設計の大要を聞くに水面より橋迄の高さは二千六百廿七呎(我七町餘)橋の長さ二百三十呎(我三十八間餘)にして兩岸の巖に植ゑ付けたる鐵の取手より鐵鎖を以つて釣り板橋の全部を硝子製とし車輛の茲を通過する際には何人も俯して橋下三十尺の下に白波の巖石に碎けて怒號するを目得る樣にし凡そ四百餘万圓を抛つて近々の内に落成せしめ來らん晩春の候には全米國の遊覽客を唯茲にのみに集めて仕舞はん計畫なりと云ふ驚く可し

天下無正聲、悅耳即爲娛、人間無正色、
悅目即爲妹、顏色非相遠、貧富則有殊、
貧爲時所棄、富爲時所趨、紅樓富家女、
金縷繡羅襦、見人不斂手、嬌癡二八初、
母兄未開口、已嫁不須臾、綠窓貧家女、
寂寞二十餘、荊釵不直錢、衣上無真珠、
幾回人欲聘、臨日又踟蹰、主人會良媒、
置酒滿玉壺、四座且勿飲、聽我歌兩途、
富家女易嫁、嫁早輕其夫、貧家女難嫁、
嫁晚孝於姑、聞君欲娶婦、娶婦意何如、

Ⓨ　Ⓨ

謹賀新年

舊年中は毎々御厚情を忝ふし千萬難有奉鳴謝候尚本年も不相變御愛顧願上候尚一月四日より十五日迄新年の御祝儀として多少の景品差上可申候

(附言) 昨冬歲より第三回値引賣行致し居候間御買求の如何に不拘一應御高覽の榮を賜らん事を奉希上候

諸雜貨卸小賣

矢野洋行

營口元神廟街

電話百三十七番

Ⓨ　Ⓨ

謹賀新年

明治四十年一月一日

營口新市街花園町(電話一三〇)

日本館主 三野ヨ子

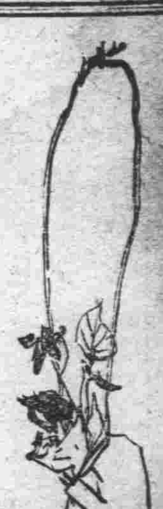
藝妓
吉勇　福子　米子　若蝶　小奴
お龍　奴　三福　手遊
外 仲居一同

謹賀新年

新市街花園街

高橋組

(電話九六)



羊飼ふ家

徳田秋聲

一年三百六十五日、風が吹ひても、雨が降ツても、前の往來で、ヂヤラン、ヂヤラン荷を着けた馬の鈴の音が聞えぬといふてとはばありません。尤もこの家の前は、國道になつてゐます。雖然この朝に限つて、往來はひツそりしてゐる、多分、この晴の爽な空氣と朗な日光とて、この廣い世界の全の物が清められたのでございませう。何處を見ても、また何を聞いても、肅然として、そして何んとなく、落着てゐます、鳥の聲を聞いても、日の光を見ても、流の音、人の聲を聞いても、山の影、田家の煙を見ても、昨日の物とはすツかり變つて、見る物聞く物、何んでも爽に、のびのびしてゐて、そして光り輝きてゐます、その筈今日は新春第一日！

譬へば、爐に燃ゐてゐる火影を見ても其通り、この爐には、昨夜から火が燃えつゞいてゐるのですから、所詮去年との脈が斷えない。殊に燃ゐてゐる柴は、去年の遺物。それでゐて、燃えてゐる火影を見ますと鮮な光を放ツて、何んとなく淨で、何んとなく尊げて、思做か、何うしても人の手に作られた火とは思はれません。初日は、もう昇りました、其日影が、明に障子に射して眼映しいやうでございます。

住ツてゐる人は、何樣なに幸ひかと思はれます、家は、南向になツて、古風な備へ。前に清な小川を抑えて、宅地も廣い。この家の末娘の、さち子といふ子は、まだ去年から引續いた夢を見てゐましたが、何かの音で、ふと眼を覺ました……すると、吹いてゐるやうな音を立てゝ、熘えてゐる柴の音が快く耳に入る。

「おゝ、今日は元日だツけ」と氣がつくと悅び胸に溢れて、「母樣、今日はお正月なんですね。」

併し母樣は、其處にお在でなかつた。これを少し不服に思つて、さち子は、滿らない顏をしてゐますと、

「さ、着物が暖まつた、もう起きても可い時分だ……お起き、お起き。」

と皺枯れてはゐますけれども、それは優しい聲、さち子は、直に父樣のお聲と知つたものですから、眼を開つて、其方を見やうとしますけれども、眼映しくつて眼が啓けられません、父樣は、爐の側て、火を繕つて、さち子の着物を暖めてゐたのでございます

「父樣、皆さん、もう起きて了つて？」

「起きた起きた。」

「お新婦さんも？……」

父樣は苦笑しさうになつて、

「何んだ、お新婦さんとは、誰のてとだ。」

「誰つて、お新婦さんよ、あの兄樣の。」

「那は、姉さんぢやないか」、お新婦さんツといふ奴があるか。」

「然う？……お新婦さんが、私の姉樣になつて了つたの、妙ねと。云ひながら、まだ覺きらぬ眼を擦りてゐると、ひらり眼に映つた物影、急いで、何んだか見定めやうとしましたが、障子には、もう何んにも映ツてゐなかツた、さち子は、鳥景で、もあツたらうと思ツて「妙ね」とまた云つて、それから「でも、父樣、あのお新姉さん、お隣の花ちやんの姉さんだてとよ。」

「然うだ、花さんやの姉さんを貰つて來たのだ……」

「だツて、妙だわ、兄さんのお新婦さんが私の姉さん……笑可いのね。」

「可笑いといつても仕樣があるもんか。兄さんの許へ娶はれて來たら、お前の姉さんだな。」

つい、二三日前、押塞つてからであつたけれども、隣家の姉娘は、此處の嗣子の許へ嫁いたのであつた。

「では、私には、姉さんが出來たの、花やんの姉さん、私の姉さんにおんなすつたの。」

「然うだ、然うだ、お前にも、姉さんが出來たんだ。」

「父樣、眞個！」

「眞個だとも！」

するとまた、

「さちや、お前、ま、何うしたの、と溫雅な聲で、今まで寐てゐる人が、何處にありませう。お前もう、七つになつたのですよ」

母樣は、何時の間にか、爐の側へ來てお在になつたのでございます。

「ま、可い、今、起きるとてろた、な、さち、今のうちに寐ておけ、大きくなつたら寐てゐたくも寐てゐられんわい。」

「でも癖になると可けませんから。」

「元日から小言をいふな、俺が今、着物を暖めてやつてゐるところだ。」

間もなく、さち子は床を離れた。そして質素ではございますが、織るも、縫ふも、母樣の丹精で出來た新らしい春着を着せて戴いて、稚ちやんと結ばれた。そこで。一寸し姿をなほし、茶の間へ出て來ますと、爐の側には、父樣の他に、お祖父樣も坐つてゐられた、何やら話しながら、お茶を飮むでお在になりました。

お祖父樣は、さち子の方へお向きになつて「や、さちか。もう、すつかりお正月が出來たな。」と決活に笑つて「ま、此處へ來いそして能く見せて呉れ。」

さち子は、づかづかと爐の側へ進むでべつたり、お祖父樣の傍へ座つた、途端に、桃から生れた桃太郎、氣は優しくて力もち」と謠つて來る聲金の鈴でも鳴らすやうな、眞似にい、聲の女の子でございました、この子は、さち子の仲よしのお友達で、お隣家の花ちやんといふ子、年は、數へ年で八つになつたところ。頰ぺたは、林檎の熟したやうに紅くつて、まんまろく肥つた、見るから愛くるしい子でございます。さち子の家の門を覗きながら、

「お目出度う！さち子さん、もう起きて……」と聲をかけました。

「私、今起きたばかりよ。」

「然う、お遊びなさいな、私、ふうちやん連れて來たのよ。」

「然う、抱つこして……」

「へえ、おんぶしてよ。」

成程花なやんは、背には、まだ新らしい人形をおぶつてゐるのでございました、雖然可哀想に人形の顏は、花ちやんのおさげ髮に隱れてゐるのでございますが、この母樣はまだ稚さいものですから、其樣なてとは頓と平氣。

體を搖りながら、

「今朝ね、寒いものだからね、ふうちやん泣いて爲樣がないのよ。」

と母樣の眞似をして、少し鼻聲に、さも困つたやうにいふ、雀が、ちちく、ち、ちく、其處らの藪や、繫木の梢や、早根やら畑に啼いてゐる。

「ふうちやんよか、阿母さんの方が泣いてゐるのぢやないか。」

と突然に、内から、大きな聲がした。花ちやんは、びつくりして眼を丸くした。併しそれは、花ちやんのお祖父樣の聲だと解つたものですから、花ちやんは頭を振つて

「あら、可いわ、私、今朝泣きやしないのよ、たつてお正月ですもの。」

「は、ゑらいね、では、昨日の朝泣いたのか、……道理で大きな聲が聞えた。」

「噓、噓、噓だわ、私、昨日の朝も泣きやしないわ。」

「然うかな、それでは、花ちやん、眞個の阿母さんになつたかな。」

「眞個に阿母さんぢやないわ、ふうちやんの阿母さんだわ。」

と眞面目である

「ふうちやんの阿母さんなら、人形だ。花ちやんは、人形かな。」

「あら、私、人形ぢやなくつてよ、ふうちやんは、人形だけれども、私、生きてゐてよ、お爺さん。」

と巧く謂つた積。

「では、ふうちやんは死んでゐるのかな。」

「あら、ふうちやんは、人形だことよ、人形ですから……人形だから。」

とまで謂つたけれども、後の言が出ない。

で、默つてると、

「何うしたな。」と問はる。

さー、解らなくなつた。花ちやんは、頓と返事に困つて了ツた。何うしても、この理屈が解らない。

暫時默つてると、やがて、やけ氣味。

「ヤツぱし、生きてゐるのよ。」

「はゝゝ、ヤツぱり生きてゐるのか。」

と面白さうな、大きな笑聲がしたので、花ちやんは、極惡さうに垂頭いた。そこで、さち子は、袂をひいて

「默つて仕ツしやいよ。彼方へ行つて遊びませう。」

「えゝ」と色ちやんは、うなづいて「貴方ン許のお爺さん、大きな聲で笑ふのね。」と小さな聲でいツて、「だけど、好い、お爺さんね。私、好よ、大好よ。」

「然う私も大好きなのよ。」

さち子は、眞個にお祖父樣が、大の大の大好であつた。雖然其皺たらけの、眉の太い顏を見ると、何うかすると、失笑したくなつて耐らぬてとかある、自体さち子は、お祖父樣の頭に、ちよん髷の載ツかツてゐるのからして、妙に、不思議に變ちきりんにて思はれてならなかつたのでございます。それて、些しもお祖父樣に怖くない、併し可愛がツては下さるけれども、さち子にとつては、何んとなく煙たい、何んとなく怖いやうに思はれる、母樣や兄さん等にはお祖父樣が大層怖い人のやうである、確に然う思はれてなりません。其證據には。母樣も兄樣等も、些ともお祖父樣の有仰るてとに、悖はぬばかりか、口を一つ利くにしても、それは叮嚀である。それはかりか、御飯の時でも、お風呂を召す時でも、何んでもお祖父樣がお先。さちやは、心のうちで、これがまた不思議でならなかツた。不思議には思うてゐましたが、それてまたさちは、何程幸であつたか知れません。何故といふに、さち子に、もし何か過失があつても、母樣や兄樣等から御小言の出か時も、お祖父樣が、さち子に加勢をして、大概のお小言は、途中で廢められて了ふのてございました。ですから、さち子は、お祖父樣が好な譯！

兩人の少女は、新らしい木履に新らしい春着、手を取らんばかりにして、いそいそ背戶の方へ廻つて行きながら、

「好い、お天氣だてとね、さち子さん。」

「眞個ね、氣が精々してね、お正月ツてえと、大概好いお天氣だから嬉しいのね。今日なんか、日本晴といふのよ、ね。」

「然うなのよ、きつと！ま、奇麗な空だてと。」

これが、初霞といふのであらう。蒼煙淡く五千の村を籠めて、靜かに立登る雜煮の煙其煙か、さも豐さうに、さも物靜かに見えて、輝く旭の光の下、に西の家東の家、戶毎の軒に飜る日の丸の旗。其旗を輕く搖かして吹くや朝風は冷いけれとも、僅に鳥の毛を飛ばす位。

花ちやんは、ふと思出したやうに

「貴女ん許の山羊、何うしてゐるでせう。お元日たと思つて朝寐をしてゐるでせうか

「豈夫。」とさち子は笑つて「山羊の小屋へ行つて見ませうか。」

「ね、私、山羊の乳を搾るてとを見るのが好なのよ。」

そこで兩人は、此の家の背戶にある山羊の小屋の前へ行つた。山羊の小屋は、左程、大きくもなけれは、屋根も低い、また壁も荒壁ではあるけれとも、小屋の裡も、其處らも奇麗に掃除がしてあつて裡に七八匹い山羊か、靜に睦まじく遊んでゐた。さちては。毎朝自分て山羊ハ乳を搾つて飮むのですから、山羊の乳を搾り馴れてゐたので、片手に柔な枯草を少し握んで、圍ひの外から一匹の山羊を呼ふと、馴れてゐるのか、其の山羊は、物靜かにさち子の傍へ來たそこで、さちゝは、其の頭を撫でてやつて、それから外へ連出し、用意のバケツの中へ乳を搾り出すのであつか、山羊は、さち子のするままになつてゐる、花子は、感心してゐる樣子で、

「山羊つてものは、何んといふ溫順なしのでせう。眞に可愛いものね」

「え、眞んとに可愛いものよ」何うかすると慍ることかあつてよ。慍つかつて、馬のやうに蹴りはしないし、些とも酷いことをしやしないわ。」

と謂つてゐるところへ

「さち、さん……」

と聲をかけながら、背戶の戶口から出て來たのはさち子の姉さん。

「あら姉さんが……」

と花ちやんは目疾く目付けて驅け出すと、さち子も、つゞいて驅け出して、右から左から寄つて、其手に、乘るやうにする、

其人は、年の頃十八九、鄙には稀な色白て眼はパツチリと黑眼がち、唇は何く、鼻はつんとして、少し下膨の顏は、誰の眼にも怜悧に、そして柔和な質と見受けられる、頭髮は結立の島田、髮でも、顏でも、[illegible]も、麗な初日を受けて、眼映しいばかり美しく輝いてゐた。

さち子は、丸い眼をいとど丸くしましまと、其顏や姿を瞶てゐると、突然に、

「姉さん、貴女、今年から花子さんの姉さんにお成んなすつたんですかね。」

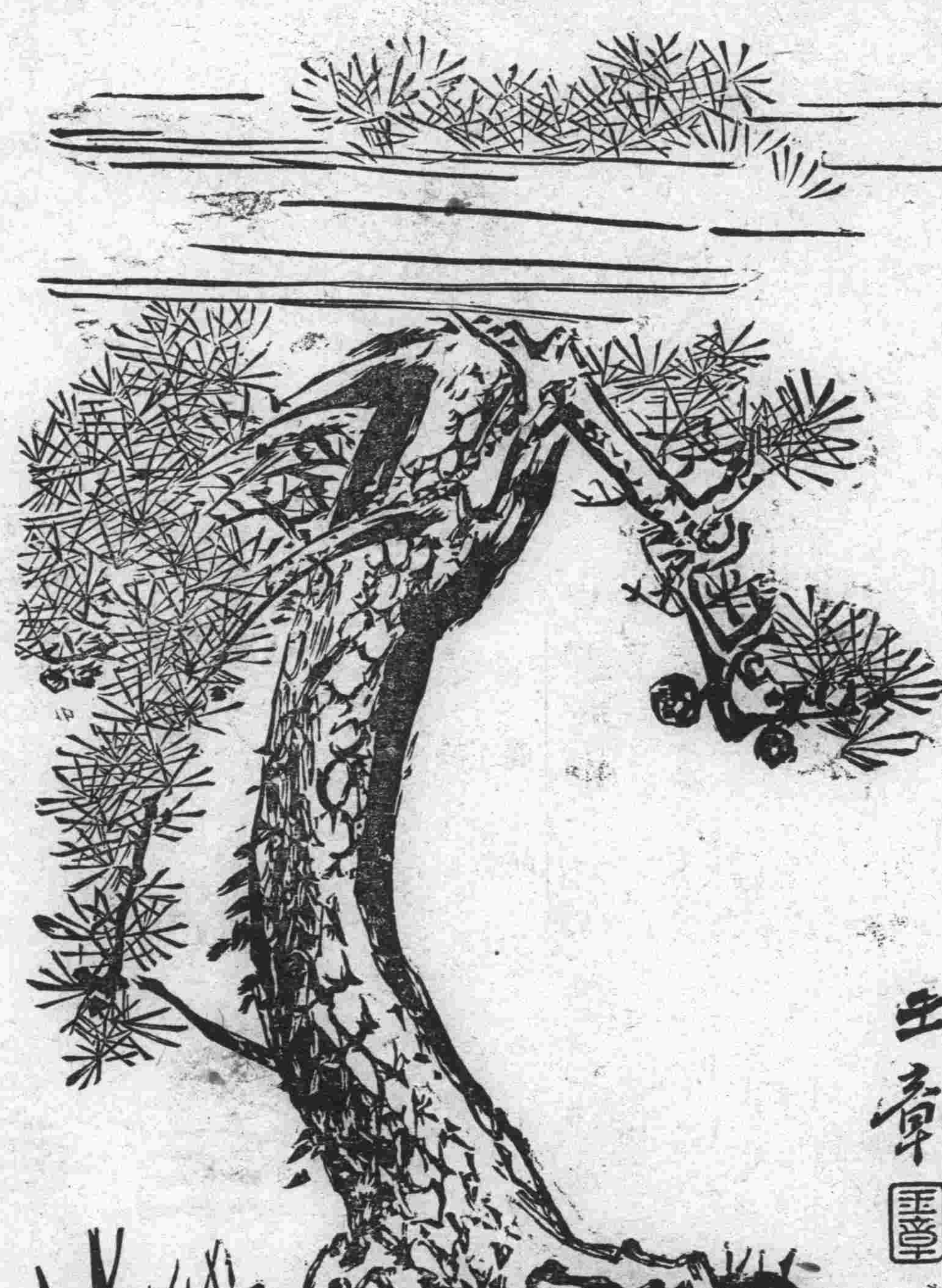
「え」とばかり顏を赧める、

「それては、花子さんにも私にも姉さんなんてせう。」

とさち子は、恰しくも花子にも花を持かせるのてあつた。

「そりや然うよ」姉さんは、につこりして、「さち子さんにも、花子ちやんにも姉さんよ。」

其の時姉なる人の顏にも、さち子の顏にも、また花子の顏にも、さも滿足したやうな、さも悅しさうな笑が浮ふのであつた、多分春の悅ひの氣が、この人等の胷に入つて、そして溢れ返つたのでございませう、何處やらで、ほうと一聲鶯の高音に山羊も紅んとなく希望ある眼て、三人の姿を交交瞶みてゐた。



●藻鹽草● 去ぬる十二日の事とか滿鐵の連中が築地なる瓢屋にて盛宴を張り例の風流、華奢を試み宴散せんとしても勃々たる餘勇の禁め難きものあり一人か第二次會の發議をなせは滿場一致の贊成て然らは此より川一つ隔つる花屋へとの號令ていさ一所にと各自に藝妓の手を把り玄關まで出て立ちしが▲久保田理事（勝美）は逸早く飛び下り其所に任りし人力車の梶棒オツ取りカラカラと引き來りいやがる藝妓の手を把り強いて車に乘せ乃公か滿鐵運轉の腕試しを見よと云んばかりに威勢能く引き出せしが四百餘哩の大鐵道一人に任せては心細しとや思ひけん中村副總裁は續いて飛び下り夫れと云いさま後推して花谷まて飛んて行きしは豪勢に見へしが今まで飮みし酒氣の頓に昇上し來りて其塲に醉い仆れて脫兎の如くなりし威勢も忽ちに處女の如くに消沈したりしも是非なけれ▲前鋒既に此の如き勢て出て行しにぞ後續部隊も我劣らしと花谷へと躍進し來り餘勇の迸る所は罪もなき疊や障子まてか多大の負傷をしたそうだ▲澁澤榮一氏は中々の讀書家て、普通の富豪が醜業婦や別莊、賭博などに耽けるのに、獨り文學を道樂として現に、馬車の中でも豆ランプを點して何か讀むが例た▲氏は又日本の外交始末を著述する積りて、最早大分捗つて居る、其の目的は舊主慶喜公か鎖港論てなかつたと、勤王家てあつたとなどを明白にするにあるさうだ

廣告

恭賀 玻璃器洋燈 及雜貨商

殘務決了ス 舊遼陽日本人會殘務委員 海南右門 林尭賀 謹賀新年 明治四十一年一月一日

會席 古料理 花月 謹賀新年

謹賀新年 和洋、雜貨商 遼陽南門外 島洋行

自三十一日午後六時 至一日午後六時

聖威八宏、光被す

外人の見たる吾が天皇陛下

頌し奉も畏けれど、吾皇の盛德英圖は昭々天日の如く國民齊しく感戴し、列國亦認識して衒らず、欽仰嘆美現代世界の帝王中最も偉大にして最も多幸なる元首と稱へ奉れり、いでや外人より仰ぎ見たる吾　天皇陛下の龍容鳳姿を傳へまつらん

前英皇公使ブレザー氏夫人曰く「日本天皇陛下御即位以來の卅七年間は其勲業の偉大なる點に於て、其汎潤の饒多なる点に於て曾つて世界帝王の何人も未だ經驗せざる所なるのみならず、亦企及すを能はざる所譬へは皇天特に御一人を選び魔術的蒸溜器を用ゐて既往世界歴史の幾千年を、斯の帝の御一生に壓搾したるに似たり

日本皇帝陛下は日本國民によりて全く神格を有すと信せらる、想ふに日本國民以外の國民にして日本人の斯の信條に悉く贊成する能はさる者と雖も、陛下を以て殆んと超人間的に莊重崇高の一大人格なりと爲に遲疑せざるへし

蓋し日本皇帝陛下が殆んと古今東西の史上に、倫を絶つ不世出の英主なるは、既に世界列國民の耳目に在る所、今更ら事々しき吾人の敷張を須ひずと雖も、而も吾人は熟ら御踐祚以來の　陛下の御身世を通觀し奉つりて　陛下の御性格に、際立ちて二個の特色の存するを看過する能はす、开は陛下の意志の鐵の如く鞏固なる事及び聰明てふ点に於て、殆んと千古を曠うするの概ある事是れなり

陛下が極めて意志鞏固に渡らせらるゝ事は國歩最難の時、十五歳の弱齡を以て御即位あり、上下の危惧動搖其頂點に達したるの時に當り、毫も狐疑逡巡の態なく、毅然泰然として徐々自家の針路を開拓せられたるに徴すべし、而して聰明絶倫殊に人物の鑑識に於て獨得の長技を有せらるゝ一點に到りては、維新の際人材を普ねく各藩に取り異材を學澤に拔きこれを巧みに配置按排して各其能を盡さしめ、毫も矛盾扞格を生せしめさりしのみならず、更に幕政王政更始の際、其進退去就を誤りし、幕府の遺臣餘輩をも棄て玉はず、其才を盡さしめられたる一事に到りては、人物鑑識の明は勿論、其稚懐濶心、眞に王者の襟度として百世に欽嘆せらるゝの價値ありと云ふへし

陛下は通常午前五時に御起床あり午前九時に至り内外臣僚に賜はるへき拜謁は始らるなり、拜謁は大底午前十一時に終るを以て夫れより輻湊する諸文書を御檢閲あり、文書の御檢閲終れは、今度は萬般の國務に鞅掌あらせられ往々深更に及ぶことも稀れならすと云ふ

昨年ガーター勲章捧呈の爲め來朝せる英國皇甥コンノート殿下の隨員リーズデール卿曰く「君が代」の曲妙へに萬歳歡呼の聲に和し紅燄ゆる天皇旗風に靡きて翩翻たり盛んなるかな新橋停車場の光景此日恐れ多くも日本皇帝陛下には親しく此處に御幸ありて我が捧勲特使を御迎へあらせらるゝなり陛下は皇太子殿下並に皇族諸殿下を從へさせられ我一行の着車するや直ちに一室に引いて御對面あらせらる陛下は御手を擧けて進ませ玉ひ温き握手の中に力ある御聲もて「我が親善の友よ」と宣はせられ龍顔殊の外有難く拜し奉りぬ

帝臣民は陛下を以て眞の上帝に非らされは人類を遙かに遠かりたる靈體として深く尊崇し奉る處なるか余今陛下の御前にありて威風凛凛神神しき御姿を拜し益々此感を深くしたり陛下は神身頗る健全の御方にましまし偉大なる其の御性格御顔に表はれたり今千代田の宮深く陛下が日常の御起居を漏れ承るに專ら公共の事に大御心を注がせ玉ひ其の餘暇には御歌など詠吟じ玉ふと

扨愈々ガーター勲章贈呈の式日となりぬコンノート殿下一行大禮服の袖を連ねて宮廷に進む事となりぬ宮中に入れは碧甍重く疊み圓柱拭へるが如し廻廊長く走り大廣間幾りに開け天井には總て繪細工を施し庭園詢に天圓の如く而かも其壯麗に拘はらず一點の虚飾奢侈を認むる能はさるは只管感嘆の外なく此の廣々と開けたる禁苑闃寂として一道の靈氣肌に迫るを覺ゆ吾等は宮殿の入口なる一間に請ぜられ準備整ふを待ちてわ列愈々玉座の前に進みぬ廻廊幾つとなく過ぎやがて一大室の板橋に出つ之れ即ち玉座の在る處にして扉開くれは英國々歌喨々として天音を齎し來り廣大なる聖殿仰ぎ見れは御床には寄木細工を施し壁には美術を籠へ帛の花綴は彫刻せる圓柱の腰線に掛りり天井は箱疊みとなし漆滴るゝが如く金を鏤めたれは星の如し

玉座は入口の正面に設けられ眞紅の絨氈を敷き眞紅の帛と天鵞絨にて作れる天蓋を覆ひ其下には大元帥の御服裝に白の御ズボン御膝上に達せる靴を召させられたる　陛下あり御座の上壇少しく後には皇后陛下御座の下壇右手には各妃殿下天女の如く各々洋裝を凝して打ち並び衣摺れの音絶へ一指の微動だに認す余は斯る偉觀に接して深謝限りなきを覺えたり

何れの國の皇帝がかくも盛んなるガーター章贈呈式典に接する事を得るか之れ唯た光榮ある日本皇帝陛下のみ　陛下は美しき鷲絨のマントル、リボン、羽冠、燦然たる十名譽章に飾られ玉ひぬ偉なるかなK、G、大日本睦仁皇帝陛下！

「十九世紀君主」の著者レートン氏も亦曰く「日本天皇陛下の御治世三十餘年の如く驚くべく急速に發達したる時代は世界の史上に其例稀なる今上陛下の御代の間に日本國民は中世的狀態より近世的情態に移り更に最も進歩したる國民の一となれり日本の天皇陛下は人民の社會に交じりて所謂平民的生活をなす君主にはあらずと雖も政治は之れを賢臣に任せて疑はず親ら毫も政爭に加らず憲政の機關をして自由に運轉せしめ眞に理想的の立憲君主なりとす日本の立憲政治が驚くべき好果を奏しつゝあるは此の明君上に在して之れを指導し玉ふが故なり、今上陛下の治世は改革また改革頗る急速なる變化の時代なりしも然かも其の變化たるや一度も激烈を極めて破壞的となりたる事なく其の急速なるに拘はらず頗る健全なる進化なりきこれ此の君の感化が常に國民の各要素を調和せしめたる結果なり

最後に記すへきは再昨年十一月旅順は堅壘未だ陷らず戰局の大勢猶はかる可らさるものあるに當り紐育タイムスは贊して曰く「滿洲の野に於て又だ旅順堅壘の下に於て戰ひつゝある日本の兵士は皆陛下を想ふて其の精神を躍らしめつゝあり彼等の愛國心は天皇陛下に集中せり彼等は欣んで陛下の爲めに死す是れ彼等の天皇陛下に對する信仰の厚きが故ならすんはあらず而して吾皆に對する彼等の信仰の斯の如く厚さは其の傳說的觀念に因るべきも主として今上皇帝陛下の御人格の然らしむる所なり由來歴史上偉人なりと稱せられたる皇帝の多くは自己の功名心熾んにして爲めに人民の批評を避くる能はざりしも日本天皇陛下は人間の上に超然として神聖なる感化を民衆の上に垂れつゝあり君は神聖の眞實は日本天皇陛下に於て之れを見るを得る也」

吳服及雜貨物商
鉄嶺西門外十番
謹賀新年
併而本年も不相變御愛顧を祈る
㊂ 高松號本店

謹賀新年
明治四十一年一月元日
鐵嶺西門外大街
[illegible]太商店
煉瓦部
工事部
商品部

改號廣告
恭賀新年
和洋御料理
鐵嶺西門外火神廟街
一進樓
弊樓遼陽に於て開放以來一進樓と稱し諸彦の御引立を蒙り居候處去る七月より當地へ移轉日進樓と改稱し御最負に辱ふせし處今回更に舊名に復し座敷等も改築致し一層勉強仕候間倍舊御引立の程奉願上候

謹賀新年
西洋家具製造販賣
營口永世街
鐵嶺西門外
洋行
エジプト
川
日本茶
行
タンス
テブル
其他色々
出來品有
電話百十一番

謹賀新年
鐵嶺西門外
松の湯
店主 田村重中

恭賀新年
鐵路火車
轉運貨物
遼東通運公司
總局　遼陽城內西魚市口街憲第五號
支局　鉄嶺西門外
支局　大連市長門町拾號
分莊　營口　海城　奉天　開原　昌圖
　　　四平街　寬城子
出張店　旅順　金州　瓦房店　普蘭店　熊岳城　盖平
　　　　大石橋　烟臺　千金塞　撫順　新民屯

謹賀新年
營口元神廟街
一力
一月一日
電話百六〇

謹賀新年
營口永世街第一號
柳亭
一月一日
電話四一

謹賀新年
旅館部　第一營口ホテル
料理部　第一樓
先以て大方の御客樣御機嫌克御超歲遊され候段樓主初め仲居に至る迄喜悅尠からず敬賀至極に奉存候尚舊年來は種々御引立を蒙り繁榮罷在候處本年も不相變御愛顧之程奉懇願候茲に一同謹で年甫之御挨拶を兼ね御禮申上候
一月元旦
敬白

店主　山縣益
支配人　武井貫一
義太夫　義多八
藝妓　春駒
同　とんこ
同　こ三
仲居　はる
同　らく
同　芳子
同　ひな
同　梅の
同　つる
同　みや
同　はな
同　よね

告
新年
溝畑洋行
鐵嶺火神廟西街
賀正
遼陽　海南右門
明治四十一年一月一日
上京中　倉田敬三
謹賀新年
森病院
日本酒
奉天 遼陽　池上出張所
文房具、米穀
北の風

營口地方天氣豫報
前日の氣温
最高温度三十度〇
最低温度十度〇
前年との比
高八度一
低四度二

在清出稼教師

白河鯉洋

●總論　顧問もしくは教習と稱せられて本邦人の清國內地に在るもの果して幾何の多きに上れるや、精確なる計數は到底知り得へきに非す、兩三年前外務省にて調査せるもの百五十餘人なりしと聞及ふ、外務省の知らさるもの固より少からす、而して又其後益す增加せる趨勢なれは今や滿洲を除きて少くとも三百人に下らさるへく、或は四百を出てんか、盛なりと謂ふへし、さるても此れ迄此等の人々の眞相か餘り我か教育家、經世家の批判に上らさりしは怪訝に堪えさる所なりしか、頃日一二新聞紙の記事を讀みて始めて此に觸れたるを見る、極めて短文にして且つ其出處も明かならされとも、余は此際に於て心ある人々に敢て告白し置かんと欲するもの有り、新聞紙の記せるものは、其要領、一、雇聘されたる教師か次第に不人望なること、二、其原因は漢學の素養なきと文部省か人格に於て如何はしきものを派遣せること、三、陸軍武官は相等なる人物のみにて漢學の素養もあり頗る信用を受け軍務以外にも手を擴けつつある事の三項なり、此れには一部分は眞相に近き點もあれと、多くは全く見當違ひなり、顧ふに粗放なる頭腦より清國の教育界を見たるものの言に出てたるならん、余は今必すしも此記事を訂正せんとは欲せす、以下唯た少しく現狀を記述するに止めんのみ。

●出稼と教師　余は此文の標題中に敢て出稼ぎ教師なる文字を用ひたり、無論武官をも含み居れるは此れ亦標題に明かに揭けたる所なり、余は敢て出稼と稱す、何となれは布哇邊に砂糖畠を耕作すへく出稼せるものと何等の逕庭あるを見されはなり、布哇にては手を以て勞動し、清國にては口を以て勞働せるの相違あるに過きす、又一方に於ては勞銀と稱し、一方に於ては薪水と稱するの相違あるに過きす、もし支那に數多の日本教師か入り込める爲め、支那は次第に日本的に教化され、支那に於ける日本の勢力は日に日に發展しつつありと思ふもののあらは、此れ數萬の日本人か布哇に渡航せるため、今にも布哇に日本の領土となるへしと速了すると一般、誠とに噴飯に堪えさるなり、布哇に行くものに布哇を研究せんとの志ありや、もしくは布哇を開發せんとの意ありや、支那に來れる教師に果して支那を研究せんとの本志ありや、もしくは支那を開發せんとの誠意ありや、勞働者か日本に在るよりも數倍の賃錢を得るか爲めに、而して其得たるものは直ちに之れを本國に送金し若くは貯金せんか爲めに爭ふて出掛くるか如く、清國に在る教師も亦日本に在るよりも二倍或は三倍の俸給を得るか爲めに、陸軍武官及ひ其系統の如きは四五倍の收得あるか爲めに、競ふて此に來り、只其位置を失はんことを是れ恐れ、其受け取りたる俸給は速かに之れを送金し又貯金すること彼の布哇の勞動者と何等の擇む所かある、余は常に支那に於ける文武の出稼教師を見る毎に、筑前福岡邊に屢は接しかる炭坑屋を想起するを禁する能はす、本人は固より特に其妻子か急に多くの收入を得るか爲めに非常に立身したるやに感し、昔て日本に在りし時羨ましく思ひ居りたる上流的風尚を裝ひ、假富限的態度を臆面もなく現出し、成り上り者的根性を遺憾なく暴露せる、而して其實は炭坑屋的豪放なくして守錢奴的貯蓄に耽りつつある、其醜態頗る憫笑に堪ゆさる也、其結果に於ては布哇にても支那にても多少の見聞と感化とはあらん、されと研究の、開發のとは元より全く此等の人々の思ひも染めぬことなり、且つや教師の不人望か漢學の素養を欠くにありなとゝは抑も根本を失したる觀察なり漢學の素養なき爲めのみにより不人望を來すとせは、武官の如きは眞つ先に不人望ならさるへからす、且つ文的教師に於ても二三の人を除きては何人か、能く些少なりとも人望を繫ぎ得へきぞや、されと此點に於て誤解されさるを望む、余は日本教師の不人望なるは漢學の素養なき爲めのみに非す、其人格の高からさるに在りと言ふものには非さることを、實際支那に於ける文武諸人中必らすしも前に云へる如きもののみには限らす、人格の低きもの多きも、亦高きもののなきにしもあらす、されと頭から人望の不人望のといふことは到底話にならさる也設令人格高く學識深きとも支那人は始めより之れを優遇せんとは欲せさるもの也、此くの如くんは學生より多少の尊敬を受くへきこと他の然らさるものより多かるへきは勿論なりと雖も、學校以外の官民よりも人望を博しうへきことは思ひも寄らす、但其の關係せる業務又は科目か目下支那の側に於いて急務なりと思へるものと然らさるとの別によりて、多少もてるともてさるとの別あるのみ、學識や人格やは寧ろ第二位なり、支那人は始めより日本人を重要視し居らす、隨分支那人はお世辭に上手なれは、此れか爲め天狗になりつつあるものも少なからす、されと支那人は斷して其開發を日本人に托せんとの誠意は微塵もあらす、支那人は云へり、今や日本人は泰西の學術を小器用に覺え込み居れは、之れを雇ふ方西洋人よりも安直にして手近く招致さる、小しく生意氣なれと此點を看過すれは案外使ひ易し、元來生活の程度も低けれは優遇せすとも不平を言はす且つ日本語なれは通譯も得易く、又日本人は始めより曲りなりにも華語くらゐは出來、諸事頗る便利なりと、斯くの如きに過きさるのみ、體能き通譯人也、故に支那に於ける日本人は僅に通辯を通じて、若しくは不完全なる支那語又は漢文によりて極めて低度なる學術を講しつつ、なまぢ半弱なる學徒を作りつつあるに過ぎず、何何顧問なと稱するものあれとも、其實は決して顧問にあらす、教育行政法典編纂又は軍制警察なと決して其の所謂顧問なるものに一言の意見をも徵することなく、其の實際的方面に至りては總べて日本人の容喙を許さすして、半可通、視察と誤謬多き翻譯書によりて自から之れを實施し、日本人の爲しつつある業務は唯た學堂に於いて講義をなすに過きす、若し講義を爲ささるものあらは徒食するに過きす、眞の意義に於ける顧問なとそら相なるもの我か日本人には余の寡聞未た一人たも之れあるを知らす、現に或る一部を顧問として其の言ふ所を聽き他の一部を教師とせは今の半數以下の日本人にて十分なるへく、又其の進步も、假令形式上なりとも既に今の數倍の程度にあるならん、是れ余か『出稼』の語を冠し更らに之れに接ぐに『教師』の語を以てする所以也、されと此の一個の輕侮的語辭には全く反對せる二個の原因を有す、單に教師たるに止まらしめ此れを其眞價に利用せさるは其愚固より支那人に在り、即ち十分に支那を開發する能はさるの責は寧ろ之れを支那人に歸せさるへからす、但し此點に於いて、餘り支那を開發して困るなと稱する日本の小慧的策略家の希望には偶然一致し、又之れか爲めに全く出稼的根性となりて、研究的開發的進取的意氣を喪失せるの罪は斷して日本人自らに在り、但し此點に於いて、常に猜疑の眼を日本人に放てる支那の恐日病的吏人の希望には偶然一致せる也。

●文部省と陸軍省　現に數多の教師中には日本にて或る事情の下に位地を得られぬ人即ち所謂きずもの、甚しきは教科書事件の刑餘の人すら之れあるは事實なり、左たくとも日本にては教師となる程の實力はないけれと支那ならは教えられぬことはあるまいなと、途方もなき先生も之れあるへし或は支那の教育に志ありと公言しつゝ其實は日本內地に於ける實力的競爭に劣敗者なり又は劣敗者たるへきか爲めに支那に雇はれ來れるもあり、されと此等は皆決して新聞記事の言へるか如く文部省の周旋に由りたるものには非ず、實際支那官憲より日本の文部省に依賴して教師を雇聘したる例は鮮もあらず、近年にては殆んと皆無なりと言ふて可ならん、甚しきは東京在の清國小商人輩の周旋に由りて雇はれ來りしものすら多し、日本內地には支那に雇はれたく望せるもの到る處に之れあり、此等の輩は各々縁故ある筋合に依賴して俸給を低廉にしてなりとも採用せられんことを競爭す、支那官憲又は學校創立者に在りては、其日本人を見ること重からず、其教育的性格の如きは始めより問ふ所に非す、其知れる學科を教授し呉るるのみにて十分なりとするものなるか故に、少しにても廉價なるを買入るるを以て最も得策なりとす、此れて人格極めて低き人物益す支那に輸入されにありされは此點に於ては決して文部省は關知する所にあらず、其責全く支那人に在り、支那人に在りても此れ始めより歡迎せる所にして人格低しなきの事には必ずしも不平を唱へざる也、頓着する所に非ざる也、北京朝廷に對して隱然重きをなし例の立憲實施、國會開設の際には勢長たるを以て自ら任し居れる殿撰張謇の如きはや安物買ひの張本也、されは如何はしき人物か在清日本教師中に在りとて文部省を攻擊するは筋違ひにして、文部省は飛んだ濡衣なり、余は寧ろ支那に聘せらるるの教師は必らす文部省の一手に引き受くることに定めたらは今の如き不体裁を除去しうへからんと信するもの也、在北京日本公使又は在東京清國公使を通じて此れを一定せる方、支那の爲めにも、又日本の爲めにも便利ならんか、但し眞に志を支那に行はんとするものに對して此文部省の仲介は却て不便を感すへしと雖も今の狀態の如くんは余は寧ろ文部省の一手引受を以て最も弊害を救ひうへきものなりと信す、此點に於ては陸軍の連中は感心なり、軍人は其の常備たると豫備たるとを問はす、資格上之れと一點に集中するを得へし、故に武官又は其系統にして支那に雇はれ居るものは悉く陸軍省又は參謀本部を通じてなれは支那より之れを遇すること武官又は其系統たる某々其れ自らに對するにあらすして日本の陸軍省又は參謀本部に對してなり、文的教師にありては競爭者多し、甲なるものに意に滿たすとし、乙なるものを雇ひ得ること極めて輕便なり武官にありては全く然らす、其背後には陸軍省又は參謀本部を負うての仕事なり、否、ロシアてふ强國に勝ちたる日本陸軍を笠に着ての仕事なり、之れを例へは周旋屋の仲介によりて身分低きものより嫁を取りたると、立派なる媒妁により大家より貰ひたるとの別の如し美貌や才智は寧ろ第二なり、彼れにありては離緣は勝手なり中生必らす薄遇を免かれす、此れにありては常に恐る〳〵厚遇さる、殊に支那現時にありては陸軍大もての時代にして、東京なる士官學校に留學すること二三年にして歸り來れは直ちに聯隊長たり參謀長たるの時なり、醫學專門學校にありたるものは直ちに軍醫部長となるの時なり、形式的に軍事を組織すれは、其れにて直ちに獨立國の躰面を維持しうへき樣に思ひ居れる時なり、約束演習に外人の賞讃を得れは直ちに强國になりたる樣に思ひ居れる時なり、練兵場に於ける動作の頗る壯觀なるを以て直ちに陸軍改新の成功せるか如く思ひ居れる時なり、武官又は其の系統にして頗ぶるもてさらんとするも豈得んや、支那の此の機運に乘じ、且つ背後に此の立派なるものを負ひ、而かももてさるものあらは此れ餘程の愚物にあらすして何ぞ此れを是れ察せすして雇はれたる陸軍教師自ら學識人格か之れを然らしめたるものと思ふは大間違にて此の間違よりして武官たるもの自ら天狗たるもの多し、而して其外見上大に支那人間に勢力あるやうに見ゆるより、文的教師にして其の位置を保たんと欲するよりして武官の乾兒たるを甘んするものすらありて遂に寺內陸軍大臣をして失敬千萬なる言を公けにせしむるに至れり、第二十二議會の徵兵令改正案即ち清國にあるものより徵兵猶豫の特典を奪ふの案を議せしとき陸軍大臣は其の委員會に於て公言すらく支那に於ける開發は總へて陸軍武官よりす、先づ武官の人顧問となりて然る後該顧問の獻策によりて次第に諸學校の設立を見るに至れるなりと此れ全然事實に反す、或は支那にある陸軍武官か斯くの如き報告をなしつつあるやも計られすと雖も、そは強いて虛僞の報告を爲すにあらされは則ち所謂る圖に乘りたるものの言なり、惡むへしといへは惡むへけれと、寧ろ笑ふへきに近し、此れを漢學の素養あり且つ人格も十分なるか故に陸軍武官は人望ありなとゝ新聞紙に揭載せしめて得々たるものの何ぞ其れ樂天的なる

●結論　余をして在清出稼文武官の醜態を摘抉せしめは猶ほ言はんと欲するものの多くを有す、今は只新聞紙に現はれたるものにつきてのみ現狀を述ぶるに止まる、心あるの士は更に仔細に觀察されんことを望む終りに臨みて一言し置くへきものあり、此文を讀みたるものにして更らに乃公は如何んを問ふあらは、余は直ちに答へん、余自身も亦出稼教師の一人なり、唯だ余は其出稼教師の通弊に陷らざらんことを務めつつありと

新年松

村上壺川

唐土の松も御國の色添えて今日新玉の春は來にけらし

唐土に住めは大和の心地して年の始めに立つる門松

恭賀新年

機器鐵廠 川喜鐵工所
營口鎭定門街
電話二五一番

謹賀新年
營口元神廟町 捌荷洋行
遼陽西關 遼陽支店
旅順鎭遠町 旅順支店

廣告
一古品毛布　約四千枚
右競賣ノ爲メ來ル一月七日午前十一時（營口時）入札ス詳細ハ當所前揭示ヲ見ラルヘシ
明治三十九年十二月
關東陸軍倉庫遼陽支庫營口出張所

謹賀新年
主任歸國に付年始の禮をかく
營口青堆子
高濱洋行（電話六番）

恭賀新年
東京赤阪區青山南町五丁目四十五番地
長崎武英

謹賀新年
營口元神廟街
捌荷洋行
野間直兵衛

謹賀新年
丁未一月元旦
豊濟門街
營口同仁醫院

恭賀新年
旅館
營口水世街
大和館
前田九一郎
電話十一番

恭賀新年
加賀谷市三

旅行中に付歳末年始の禮を缺く
天春又三郎

大小貨物取扱廣告
弊店儀從來東清鐵道輸送貨物取扱來り候處今回業務を擴張し各位の御便宜を計り大小貨物蒐集の爲め毎日店員を差向け懇切叮嚀に御取扱可申候間舊に倍し御用仰付被下度候
明治四十年一月
東清通運總局　電話（一六四番）
新市街貨物取扱所　電話（二〇六番）

謹賀新正
井上公司
組員一同

北京出張中に付歳末歳首の禮を缺く
岡部次郎

謹賀新年
關東公司
三谷末次郎

謹賀新年
森山元

恭賀新年
關東公司
西大作

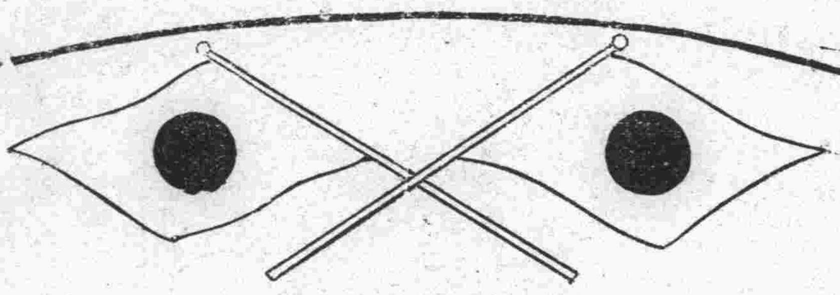
米國製造　ゴム製銃獵靴　防寒防水ゴム靴　編上靴
●ゴム長靴
●ゴム底
●運動靴
●小供用ゴムデカバキ
●寸法用書改正第八版定價表郵券二錢送付あらば進呈
登錄商標
●近來此の色クリームに似造品を販賣する者あり
登錄商標櫻印に御注意を乞ふ
獨逸國製黑革用黑クリーム　一瓶金貳拾錢
獨逸國伯林市ハイデ商會クリーム製造元

日本代理店
雜貨直輸入　靴鞄製造問屋
東京市芝區櫻田伏見町
內田直一商店
（電話新橋一五五一番）

謹賀新年

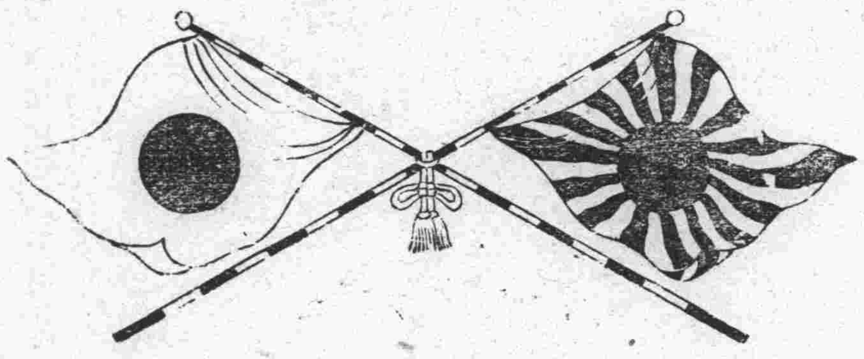
舊年中は色々御引立に預り千萬忝奉謝候尚本年も不相變御愛顧の程伏而奉願上候

元旦　敬白



遼陽

第一東洋館
第二東洋館
東肥館
遼塔ホテル
遼東館
玉家
滿洲ホテル
滿洲館
藝陽館
東雲館



恭賀新年

正月元旦

遼陽消防組

取締　北野卯之吉

副取締　谷口今朝太郎

遼陽消防組寄附金人名

一銀二百圓	正金銀行　中村得三郎
一仝百圓	有馬組　海南右門
一仝五十圓	林堯賀
一仝百圓	小野幸次
一仝五十圓	岩田清三郎
一仝	安月喬資
一仝	大東公司
一仝	遼塔ホテル
一仝	藝陽館
一仝	遼東館
一仝	東洋館
一仝	第二東洋館
一仝	福榮洋行
一仝	滿洲館
一仝	玉家
一銀三十圓	曙洋行
一仝十圓	藤原洋行
一仝三十圓	掛谷新太
一仝	立井洋行
一仝二十圓	播摩洋行
一仝二十五圓	渡清洋行
一仝二十圓	東肥館
一仝十圓	來來亭
一仝二十圓	北原商會
一仝五圓	小川メイ
一仝四十圓	井門洋行
一仝十圓	山縣洋行
一仝七圓	三好トヨ
一仝五圓	中村源太郎
一仝二十圓	山崎四馬太
一仝四十圓	㊂洋行第三支店
一仝	石光洋行
一仝三十圓	金舛洋行
一仝	遼陽館
一仝二十圓	丸山館
一仝	氣はらし
一仝五圓	姫野ミナヱ
一仝一圓	西關樓
一仝二十圓	吾妻家
一仝十五圓	吹寄
一仝十圓	日の丸館
一仝	日清館
一仝二十圓	鹽川商會
一仝十圓	中村洋行
一仝五圓	中谷支店
一仝十圓	一方亭
一仝	石川洋行
一仝	近藤銀作
一仝五圓	岡本寫眞館
一仝三十圓	中村松之助・西谷廣吉
一仝十圓	上原謙三
一仝五圓	福田金太郎
一仝	金光堂時計店
一仝	七里洋行
一仝	荒田彌市
一仝二十圓	滿洲日報社遼陽支局

合計　壹千六百八十二圓也

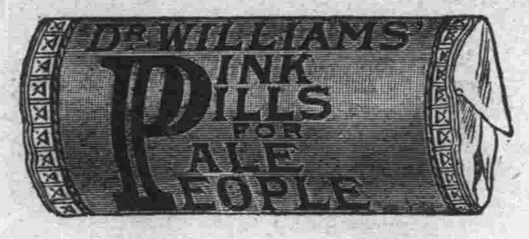
本店 東京市日本橋區駿河町壹番地
支店及出張所々在地
倫敦、漢堡、紐育、桑港、孟買、爪哇、新嘉坡、甲谷他、馬尼剌、香港、厦門、臺北、臺南、廣東、上海、漢口、芝罘、天津京城、仁川及內地各要所

三井物産合名會社牛莊支店
(營口重盛街第十號)(電話番號 六十六番 九十一番)

滿洲各地出張所々在地 大連、安東縣、奉天、鐵嶺、寛城子、

○營業科目
○販賣部 大豆、豆粕、豆油、棉糸布、木材、銅、石炭、木炭、セメント、燐寸、麥粉、砂糖海參銑器諸器械各種金物其他內外國製品及原料販賣
○倉庫部 貨物保管 (青堆子河岸電話番一二八番)
一船舶部 社內並社外船代理店
一保險部 明治火災 東京海上 日本火災 保險會社代理店

東盛和
本號在營口創設二十餘年專辦出口餅油豆各等土貨進口棉絲布疋火柴洋麵糖煤雜貨發行並滙兌銀錢兼代客經理買賣租船裝運事宜營口廣東兩處自建碼頭能泊輪船二艘棧房地方寬大凡泊輪船裝卸貨物極爲便國貯油餅豆米麥更爲合宜兼置有輪船 艘名城多利能載重二萬擔如有欲租船船運貨及在棧貨物水脚棧租格外從廉 貴客賜顧請到小號面議是有
總司人 葉亮卿謹白



積勞成病
本士劫賓士迺暹京兵角酒餉公司之總巡也居是職者已三十有六年矣此數於年間偵緝走漏則其閱歷之深冒險之多有非常人可及日來劫君與人重談往事據云向者早晚緝私登山涉水受盡多少風霜日積月累遂染了骨痛之患一病凡年之也幸而免矣而推其致愈之由端賴香服韋廉士大醫生紅色補丸也此丸之功力神速出人意表凡患斯疾者切切不可不試云云後復叩其當日情形如何者刼君又云其病初起於右腕繼及於肩後下於足左膝尤甚腰背皆然由是而遍體均痛痛甚之時只可席雖而臥若睡褥上其慘反不可言如是或有一月之久雖延歐亞藥服萬種而寸效毫無或輕或重如是者又本四年之久一日偶閱報紙所載有同染是病後服韋廉士大醫生紅色補丸而占勿號者予遂決意一試郎向本處購得此丸多少乃第一瓶尚未服了即覺大有轉機向患頭痛即巳停止服了第二瓶之後則手足可以舉動升可以起坐矣是以連服無間直至々病皆除精神復元而後巳今也賤軀粗適步履如人矣足下不妨將弟言普告同胞也按骨痛之病莫不謂起風濕究其實則因血有邪毒而風濕乘之耳韋廉士大醫生紅色補丸能淸血祛毒又能生長新血是以能愈萬種 肝木不和 食積不化 頭痛 血枯 筋衰 先天不足 後天失宜 半身不遂 脚氣衝心 山林瘴 皮膚濕毒 瘰瀝 疸纏 等症 大凡發熱下痲 感冒之後須謂補者均宜 老少婦女經來各恙服之奏効如神各處藥肆行店均有發售或直向石叻海邊第一虎吊橋脚 韋廉士醫生總藥局採買亦可 每樽價銀一元五角 每六樽價銀八元 不論遠近郵費均免 再者劫君現已告辭總巡之職自行懋遷也合幷聲明
滿洲總代理人
牛莊遠來洋行

海天春
本飯店今由廣東聘到庖師專辦英法大菜味美價廉各樣西式點心無不精緻以及安寓各國官商院落寬敞房舍潔淨男女各扉均照西式現定於十月初八日開市仰冀
華洋官商光顧晏會便酌各隨尊意特此廣告
海天春主人謹啓

番菜館
本店 設在奉天小西關小什字街北口內路西門面
今般弊館に清潔閑靜を保ち冬期の設備を完全にし本月廿三日より料理店開業仕候就ては原料を精選し且廉價を以て御命に應し御取扱ひ萬端誠實に致すへく尚又館內は手廣にて毫も御不便の事無之樣注意仕り候間幾久敷御引立の程願上候
明治三十九年十一月
奉天小西關小什字街(北へ約一丁入る)
海天春主人敬白

謹賀新年
布疋發行
信用運送
橫濱火災保險株式會社代理店
營口西北街
永順洋行
(東櫃 九五番 西櫃 九八番)

日本官煙各様

老牌香煙
蝙蝠 利利 雙仙鶴 朝日 捷利 駱駝
代賣 豊生洋行 大德元 加藤洋行 北原商店 裕和盛 代賣
營口元神廟街日本官煙專賣處
遼陽西街日本官煙專賣處

謹賀新年
本年も不相變御引立を願舛
大坂心齋橋筋周防町角
小原子ル店
(電話東一八九五番)

謹賀新年
舊年中は一方ならぬ御引立てに預り難有奉存候尚本年も不相變倍舊の御引立の程偏に奉懇願候
主人敬白
高等旅館
守備隊指定旅館
金城ホテル
會席御料理
金城館
明治四十年一月元旦
淸國營口永世街
館主 齋藤富次郎 (電話八三)

各位御中

恭賀新年
金城館內
藝妓
金太郎 金勝 金時 金蝶 金藏 金丸 金六 金柳 金花 金一 金二 金八
仲居
取締 つる いま せき よし その はな みね ちよ さと

客年中は皆々樣の御引立に預り有難御禮申上候尚本年も不相變御愛顧の程奉希上候
謹言
一月元旦

御ヒイキ御客樣中

宮門抄

初九日

理藩部 廂藍旗值日無引見 陸潤庠等同鄉官謝 恩 濤貝勒由西陵回京請 安 希朗阿延康各續假十日 錫廉伺候 召見

召見軍機 濤貝勒 錫廉

初十日

內務府 八旗兩翼值日無引見 恭王假滿請 安 于中堂續假一個月 掌儀司奏十三十五日祭

奉先殿派 貝子溥倫行禮

召見軍機

皇上本日巳刻 升乾清宮德國使臣雷克哥 覲見呈遞國書

十一日

外務部 欽天監 侍衛處值日 宗人府引 見十一名 內閣二名 度支部十二名 廂黃漢十六名 正白漢四名 正紅滿四名 正白蒙八名 內務府十五名 精捷營二名 莊王賜于由東西陵回京請 安 達壽到京請 安 值年旗奏派管理新舊營房 派出樸壽 景澧 明啓 葛寶華 順王 醇王 特圖慎 溥興 禮部奏請神牌還位 派出莊王 恭王 又奏派祭神牌還位期告先 派出禮王 溥艮

召見軍機 鐵良 紹英 陳璧 達壽

提督衙門奏據廂紅旗蒙古副都統暫留左翼翼尉烏珍副翼尉春委翼尉普泰督率協尉福壽常清副尉連瑞章京奎元永祥秀璋英珍哈秀如年德俊等在何家口各等處拿獲奉 旨交拿要犯張四巴即張雲亭馬大即馬春山等二名請交法部又據南營參將曾崇蔭等督率員弁將奉 旨交拿人犯祁全牛鐵兒二名請 旨交法部

上諭恭錄

初九日奉

上諭林紹年奏舉劾屬員一摺廣西補用道沈贊清在任候補道前慶遠府知府王祖同前署桂林府知府思恩府知府歐陽中鵠署百色同知補用知縣田駿豐署容縣知縣准補天保縣知縣包垂中賓州知州吳永治着均傳旨加獎候補道倪懋禮年已及耄鄭輔綿識見卑汚試用知府李長祿操守干求均着勒令回籍柳州府知府賀源清悍于去邪不堪表率候補知府潘泰謙溺愛甚深致滋物議均着以通判降補開 河州知州李本誠輕佻浮蕩懷遠縣知縣徐沖霄約束不嚴署來賓縣請補永福縣知縣廖萱榮違例苛罰按察司經歷陳紀泰帷薄不修劉署左江鎮中軍遊擊陳心炳巧于營私候補都司馬漢衛工藍蔚補用守備陳兆林收受賄規均着革職安平土州判范釗縱匪殃民着發往軍台効力餘着照所議辦理該部知道欽此

十一日奉

上諭廣西慶遠府知府員缺着王毓芝補授欽此

奏議

奏爲整頓粵海關稅務出力人員請獎摺 署兩廣總督雲貴總督 岑春煊

太子少保頭品頂戴署理兩廣總督兼管廣東巡撫事務雲貴總督臣岑春煊跪 奏爲整頓粵海關稅務官員實在出力欽遵 旨擇尤分別獎前保恭摺具陳仰祈 聖鑒事竊臣於光緒三十一年二月二十日具 奏接管粵海關稅務日期暨前撫臣張人駿管理期內規畫整頓節省歸公銀兩撥補原提匯豐磅價無著之款並請將前撫臣張人駿 量予恩施在事各員擇尤保奬奉 旨張人駿任事實心深堪嘉尚著交部從優議敘餘著照所議辦理該部知道等因欽此欽遵咨行到臣當經分別咨行並將在事出力各員銜名分咨吏部戶部查照在案查粵海各關口歲收稅課數百萬歷經監督不自經理內而所收稅銀委諸庫書掌握任其肆意侵盜外而各屬稅口派令家丁書役徵收水手復從苛索因是蝕稅病商弊端百出其尤甚者則爲歷屆奏銷任憑庫書援造將同爲稅司按結徵報之款應歸一案併報者分而爲三又不同時造報故得少報收數浮報支數少收浮支之款盡入庫書私囊不如此則前充庫書周榮曜即周兆熊不能侵蝕稅款二百數十萬兩之鉅也臣疾惡如仇除弊務盡自光緒三十年五月奉 旨粵海關監督歸兩廣總督管理即派現保道員湖北候補知州朱祖蔭馮嘉錫等密查海關積弊預籌整頓之方旋臣赴廣西督師奉 旨著廣東撫臣張人駿先行接管臣與撫臣往返電商札委朱祖蔭馮嘉錫爲關務處坐辦並委補用道署廣東廣州府知府陳望曾爲提調實力整頓在撫臣管理期內裁口書撤水手釐剔中飽撙節浮靡歲增歸公銀四十七萬餘兩奏准撥補匯豐磅價無著之款迨臣凱旋抵東接管關務裁減口卡以惠商民扼要堵緝以杜偷漏更定奏銷辦法期於弊不復生清釐解部成本務使款無積欠而每年指還四國洋款之關捐無著銀四十八萬兩亦得於關稅項下按補又復查抄侵盜鉅帑之關書周榮曜等財產洋銀近百萬兩將追到之項解充練兵要需並撥濟廣西賑款至是始將二百餘年相沿之積弊一概滌除現在通關款項條分縷晰綱舉目張守此不變可期經久蠢吿監督新舊交替結算稅課往往經年累月交代不淸今臣交卸關務所有任內經徵洋常口稅以及節省歸公銀兩即日交代淸釐此其明效大驗粵海關務經此認眞整頓改絃更張計每歲增解部庫成平銀三萬七千餘兩撥補四國洋款銀四十八萬兩又節省歸公已撥補卅一年分匯豐磅價無著銀四十七萬一千六百餘兩以上歲增之款幾百萬兩連查抄關書吏周榮曜等財產已充練兵經費並濟廣西賑捐共銀七十餘萬兩裨益公家實非淺鮮臣身任兼圻受 恩深重凡關 國計民生之事義應不惜心力不避勞怨爲所當爲所有在事出力各員自應欽遵前奉諭旨擇尤分別請獎以示鼓勵提調委軍機處存記二品頂戴鹽運司銜補用道署廣州府事廣東候補知府陳望曾坐辦委員另案已保二品銜分省補用道前湖北候補知州朱祖蔭馮嘉錫等三員均能稟承指示苦心經畫將積年牢不可破之弊徹底革除增益鉅款更定辦法實屬尤爲異常出 第其升階升銜皆無可保擬將該二員均請送部引 見候 恩錄用收支委員知州銜前湖北試用直隸州州同丁兆元經管數百萬款項勾稽匯正條理井然實屬異常出力擬請免補州同以知州仍留湖北歸候補班前補用總辦高雷兩府口稅兼洋藥緝私委員廣東試用同知稅厘往年收銀二三万兩者現增至十一万餘兩實屬異常出力擬請免補同知以知府仍留廣東補用稽核兼文案委員廣西候補班前知縣蘇乃錯心思細密情形熟悉廓清積弊多賴敷陳擬請俟補知縣後以直隸州直隸州補用總辦潮州口稅委員道員用廣東候補知府朱咸翼專辦石龍口稅委員廣東試用知縣徐元英均能於改章之際首斥逐盤踞關卡之書役索擾商民之水先手經徵口稅亦均收過半朱咸翼擬請俟歸道員班次加二品銜徐元英擬請補知縣後以直隸州直州補用以上八員分別核實擬獎誠屬毫無冒濫事所裨益財政者總數則百數十万散數章亦皆應遞議准合無仰懇天 恩均予照請給獎實出鴻施逾格所有東整頓粵海關務實在出力各員分別保奬之度支部及政務處查照外理合恭摺緣由除咨明吏部暨分咨戶部即新改具陳伏乞 皇太后 皇上聖鑒訓示謹 奏奉 硃批該部議奏欽此

中外要聞

●隨員陸續回京 欽使隨員自十一日爲始機第次出奉回京一節已誌前報茲聞現有隨員十名內外已於十四日啓程回京

●欽使調查學課 振徐欽使於十三日亦皆同趙次帥張學使赴法政學堂師範學堂等處考察學生功課

●派管理軍諮海軍員 確實消息陸軍部鐵寶臣尚書關于該 官制事宜會同司員現正認眞編制所有海軍部及軍諮處暫不獨立擬于該部內設專司辦理以爲他日獨立之地步並聞東南云

請立案現已貢集欺華股三百餘萬不日寄匯到京再稟郵傳部立案主外間傳云有法人出查運動一節查係不確

●特派員迎接欽使 東三省查辦事件振徐二大臣查察事竣不日回京已本誌報現兩宮以時值嚴冬朔北風雪寒透征衣不便久留深爲懸念日前電催回京故初十日民政部農工商部特派迎接二欽使回京之委員各一名已紀起身奉矣

●鐵路案卷移交郵傳部 農工商部昨檢齊鐵路案卷日間即移交郵傳部以專責成自商部管理鐵路己來滬甯及蘇杭甬兩路皆從洋人手中爭回而商辦之鐵道皆極力提倡江蘇浙江江西皆紳辦經商部提倡有成者潮汕新甯皆商辦經商部提倡有成者此後歸郵傳部其設法推廣當更有起色也

陸軍部章程交司員公議陸軍部分司章程昨日發各司員核議

●陸軍部提飭各省練兵 陸軍部擬每省分練公鎮之兵其餉由該省督撫發給平時歸督撫訓練該兵歸陸軍部節制及調遣而將弁之升降委用均由陸軍部主權

●擬聘名譽議員 聞民政部各堂憲現擬聘京師報館主筆爲本部名譽議員如三年無過諫議有裨即行奏充補部中議員以正得失會裨治理

●溜冰遊戲 北京外國人總現在東交民巷海關對過地面開設溜冰遊戲之場以備會員怡情須俟結永堅固時期公餘齊集溜冰遊戲以資消遣而壯觀力至其會員期約在臘月中旬矣

●密電淸銳嚴查 聞軍機處有密電致江甯將軍淸銳在東嚴行查辦勿循情面等語蓋淸軍日前來電言已抵濟

●公立同仁醫院 本埠有醫院之設係由甲辰戰役前一年時同仁會先派醫士酒井君至該埠嗣後立分會院駐營此時收留病患者共約七十八大有暢旺之象無幾該埠爲俄軍佔領酒井君等與諸日僑均回本國該會事業院亦中止矣迨後俄軍敗俄占據該埠即由軍政官設醫院以便醫療本年陽二月軍政官向同仁會求派醫學士松井君抵該埠監督醫務松井君學術兼優爲人溫厚体恤病患信用甚厚如華人多願信君親診病脈者由此該埠醫院又形一倍發達之勢形醫院屋舍統係磚造高構兩層地址約五百畝現收容病患者約五于人設立經費約十五万元另在西營口埠分設醫院一所以便貧病者隨意就醫現每日乞診者不下二百餘人亦可以觀同仁之一端矣前軍政署未裁撤時擇定約八千餘畝之地段爲興築醫學堂 址現經營竣自應俟明春再行興築云

●都督府經營事業費款 關東州都督府明年應接辦事宜最要者爲德律風及自來水興築事業德律風前係日陸軍部架設者在旅順大連安東縣遼陽奉天鐵嶺營口一帶但營口爲滿洲商貨總匯之區勢不可不將各地方所設德律風與營口聯絡以通消息因此都督府在明年度支預算案內揭明架設德律風經費需三十万元自來水係兩年接辦之事業者大連自來水興築經費共一百万元本年度支已有四十万元明年需款六十万元以期告成然此欵現延至後年改爲三年竣工如旅順自來水現尙由陸軍部經理至明年擬改歸都督府接辦務期從速告竣云

●呂盛兩大臣電請免厘鑄錢 昨報紀呂盛兩大臣電告賑饑情形現兩大臣又續電軍機處請免厘稅多鑄銅元維持賑務電云軍機處洪再災區義紳來電稱糴糧關口阻滯民將絕食非開通來源不能接濟請暫免江南北糧食厘稅庶民命多所全活又稱本地錢少而貴官賑亦照義賑在省兌換銅元前米當即電商江督災區運糧暫免厘稅惟江督來電銅元自停鑄後所出無幾義賑固係紳捐是必從寬現已悉索以應并無餘存若官賑亦照此辦不獨難禁虧耗亦無此許多銅元查官賑奉撥洋賑合計約需銅元貳二百萬千之多收放者錢若任官賑錢貴仍須國家多出銀兩甯局添此銷路 義賑湘小每兩易銅元一千三百向無虧損要在賑錢須在額鑄之外不能無算餘利可否兩飭下度支部轉行江南准其額外提鑄銅元貳百萬千專供義洋賑之用趁此運河未凍急需兌運方免貽誤至現請糧食暫免稅厘關係民食亦關餉源應如何由來源通暢不礙財政各處電商督撫分別辦理乞代奏海寰宣懷 謝冬三

雜錄

●盜魁惡滿 昨晚埠民相傳東埠有盜魁回民陳 入與其胞兄先年在街提籃日賣麪食等物奈因賭蕩無常終年艱窘夜時漏肘履多曳踵忽於俄人境之際同其胞兄北去數月旋回立皆美服華裳日常三換於是大肆强橫兇惡無比一切良民鮮不避其鋒者聞其於四外率帶匪類多名恣行掠刼且戕殺其同類某某末一被殺者復用火焚之兇狠極矣現聞其被人控告省憲扎飭河北富統領處派兵捉拏昨有言蓋平巡兵者誤也前夜有數兵偵悉陳宿家中時其門已扃遂破扉闖進及鬭其室戶川力甚猛兩戶割然豁開震其承塵橫楣板上遽墜快槍三桿落地俱飽子藥咸曰殆彼惡貫滿盈若或使之俾其兒具出現耶該兵等急將陳某捉獲縛於店內次日牢釘脚梏并槍二桿解過河北送往省垣法辦云

●錢商病民 蓋平縣馬大令前因中銀錢之價勸商招股籌辦官錢局以通融市面而便商民定銀價每錢九千五百銀元價六千九百其心固善也不知商情譎詐闔無天日竟視爲壟斷之專利自開局後任意漲價又有所謂會期銀者還時須帶利二分遂使蓋邑商民極形不便大失開局之本意而馬令亦以其爲官錢局也月出辦公款若干遂亦置若罔聞任若輩奸商以隨便上下其手豈知闔邑以該局銀行爲生命乎其價則衣食可裕漲其價則俛仰無資一轉移間而嗷鴻徧野矣是該局之病民爲何如哉獨怪馬令者之竟爲該局所惑無乃利令智昏乎良可浩歎

營口雜記

●組織新市街之要點

關東都督府將營口新市街之保護權決議其取締規則管理方法要點曰新市街之學校病院公園鐵路暨公共經營等事均歸都督府監督而居留民會都督府指定會員十人以組織一切公共治安之事今已發表刊布想必有一番嶄新氣象也

●營口巡警之戒備

營口自接收以來一切地面之治安公益行政管理權上爲警察監督之前數日突有匪二百人潛入營口意圖刼掠商富現馬警隊日夜梭巡不敢稍懈又以梁道赴省備有不測之舉紳離辭咨故戒備綦嚴如此亦可見甲局之警兵盡力不愧保護商民之責任矣

料理 一力
營口元神廟街
店主 堀 万助

旅館 東京樓
營口元神廟街(電話二一八)
館主 熊田象次郎

料理 翁亭
營口元神廟街
店主 長谷川金次郎

旅館 大和館
永世街三十四號(電話十一番)
店主 前田九一郎

料理 萬梅
豊濟門街第百〇四番
店主 田島 彌助

料理 桝家
(電話五九)
營口豊濟門街第四〇一號
格田まさ

鐵嶺 日乃出館
陸軍指定旅館
會席御料理
館主 市村清吉

増築落成御披露
時下嚴寒の候に御座候處大方諸彦愈御隆祥奉慶賀候降て弊館義本年六月左記の處に新築移轉營業罷在候處御得意様各位の一方ならぬ御引立に依り二十有餘の客室は絶えず滿員の有様にて爲めに遠來の御客様に對し往々御斷りを申上るの不得止始末弊館の常に遺憾とする處に有之候依而先般來新に客室十餘間の増築を企て日夜工事督勵致居候處此頃に至り漸く竣工且裝飾等萬端の設備も整頓仕候に付以來一層の注意仕り勉强丁寧を旨とし大方の御愛顧に可奉酬覺悟に御座候間何卒倍舊の御引立を賜はり度此段奉懇願候 敬具
明治三十九年十二月十五日
和洋双備
遼東ホテル
大連市信濃町
電話一三一番

陸軍指定旅館
福屋
鉄嶺西門外

奉天小西關大街北側
商人御定宿 瑞豊館
館主 河野嘉吉(電話□)

奉天兵站部指定旅館
奉天小西關大西路北
茂林館
(電話二十五番)

御定宿 第一東京館
奉天小西關第五分局八一〇
館主 松田平四郎
今回弊館組織に大改良を加へ清潔閑静を主として旅館を專業に專ら御客様の御便利を計り内湯新調仕候間御來宿の程奉願上候

會席御料理
大勉强廣告
▽すし丼仕出し
▽うどん
▽てんぷら
▽精肉かしわ鋤焼
▽精肉切賣
鉄嶺西門外火神廟西街
日鐵館

御待合 元祿亭
西門外大通(妙のり)
座敷は閑静にして温く閑碁の備へ付け適助御叉手輕くて一寸一盃宦敷諸彦の會合にも仕候間陸續御來遊の程奉希上候

材木廉價各種販賣
營口新市街
塩川商會
(電話八九番)

西洋家具製造販賣所
營口新市街塩川商會院内 電話(八九番)
石本組
今般西洋家具一式製造仕大方の御需に應可申候尚御好に應じ如何様にも製作可仕候間多少に不拘御注文被成下度奉願上候
追て御用の節は電話を以て御通知被下候はゞ何時にても御伺ひ可申上候

旅館料理
奉天大西關
扶桑館
今度室内に大修築を加へ名妓數名を雇入併せて球戯場を増設仕候間諸方御客様倍舊の御來遊を祈上候

鐵嶺
會席料理 九洲館
火神廟街
室内整頓美人は新來價格は廉直

新荷廣告
一大塊石炭。木炭
一無烟炭。木材
殊ニ無烟炭ハ弊店一手特約品ニシテ火力強大ニシテ普通石炭ニ三倍以上ノ耐久力ヲ有シ室内ヘ汚染セズ烟突掃除ノ必要ナク濟經上尤モ有益ナル事本品ノ特色ナリ
營口永世街
喜久洋行
(電話一五二番)(仝 三一四)

鐵嶺
陸軍御指定旅館
高砂ホテル

満韓境上唯一樂園
五龍背温泉
安奉鐵道五龍背驛にて下車 安東縣より一時間餘賃金四十錢
温泉場は五龍背驛の南二丁
靈泉如玉 眺望絶佳 效能顯著
(電話六一番)へ御申越被下度候

鐵嶺
會席御料理並ニ御旅館
彌生館

見よ!!!富
●この廣告を見逃す勿れ
臺湾彩票
第二次賣出し
●彩票一本の賣價は金六圓
●小口一切の賣價は金六十五錢
●開票期日は一月三十一日
●今回の當籤は前回に比し二分五厘强の割合よろし
●遠方より御注文の方は必す書留料封入を乞ふ
大連、湖北、川漢彩票代賣所
營口西北街
裕和盛號
滿洲一手特約店
鐵嶺西門外停車場通り
裕和盛支店
代理店
奉天小西關外二七四
武信號

痔核(いぼじ)
梅毒 婦人科
外科 胃腸病
五個年の經驗に由り今回手術を要せす苦痛なく入院の必要なく唯一二回の注射にて速に全治するを保證す
專門日本醫院
入院隨意(電話二二七)

鐵嶺西門外南
會席御料理
うどん
朝日亭
朝日館
館主 北田卯太郎

新荷到着
一、各種洋酒
一、埃及煙草
一、高等麥酒スペシャルライト
一、極上紀州本場蜜柑
尚は弊店發賣の商品切手は歳末歳始の御進物用として至極御格好の者に候
高等雜貨商
◎營口元神廟街(電五)
關東公司本店
◎奉天四平街(電十三)
關東洋行
◎仝小西門街
仝分店

會席御料理
柳亭
永世街第一號
電話四二

新着荷

營口特約大販賣
大原洋行
永世街第二十八號
(電話二百二十二番)
新市街花園町
大原洋行支店
白米、醬油、味噌、木炭、酢、淺草海苔、罐詰、乾物、東京タクワン
蜂葡萄酒 新粕漬大根

鐵嶺
會席御料理
葛城館
唯一飲料 ◎金露 ◎新著
鹽魚乾魚乾物類 各種
大賣出
滿昌和
鐵嶺西門外

石炭各種廉價販賣
營口新市街
飯塚工程局
(電話一三五 一六五)
仝 石炭置場
(電話一一八)

會席御料理 藝陽館
鐵嶺西門外
材料は新鮮座敷は閑雅美人は澤山

營口新市街
販賣品目
特約販賣品 乾物類
象正宗 各産物
札幌麥酒 茶菓子
蜂印葡萄酒 和洋紙類
孔雀印すゞ水 呉服類
堀井謄寫版 小間物
森永西洋菓子 洋服附屬品
鹽釜齒磨粉 西洋家具
松田式縫機 荒物
名古屋時計 金物
[illegible] 漆器
小林製藥 硝子物
陶器
一般商品 玩具
醬油味噌 履物
[illegible] 帽子
[illegible] 美術品
和洋罐詰 其他色々

加藤洋行
西洋家具新着
卓子 椅子 ソーファー
アームチエーア 簞笥
サイドボールド デスク等
右割安もの到着仕候に付御來觀の上御購求願上候

大勉強
料理
鉄嶺 惠比須 西門外
離座敷落成
美人新輸入

御指定旅館
會席御料理精々勉强
遼陽城外西門通り
藝陽館
裏二階建新築落成
電話第 號

奉天南門裡路東
專做英法大菜隨時便用
晏海樓番菜
分此 安寓 洋華商官

官製烟草
福壽草 和
白梅 リリー
あやめ スター
さつき チエリー
はぎ ロツグライフ
敷島
二和洋雜貨罐詰類
ペルモット 宇治茶
ワキスキー 舶來菓子
ブランデー エジプト
くルメ各種
奉天小西關大街北側
千賀洋行
奉天鐵嶺大南街大南門內西側
千賀洋行第一支店

猟銃
拳銃
土木用工具
材木
建築金物
各種
湯沸器
新発明
營口永世街
寶門洋行

告
鐵嶺　日本亭
室内に修繕を加へ清潔に致し又美人も増加仕り候間倍舊來遊を希上候

東轉推子新橋南
淡谷本局
電話二百七十九番

營所西洋際老爺閣東沿海洋南沿本宅第四段門牌二十六號

品仁裕號
係裝運各樣火輪船生意兼賣各樣洋什貨糧石等此僅
營口西大廟街路北蓼乙第十三號

●北極へ二百哩

米國の北極探險家ペーアリー海軍少佐が探險の途に就いてから久しき間其消息が絶えて居たので、一人は其安否を氣遣つて居つたのであるが、先頃倫敦電報にも出て居た通り北極のラブラドルから少佐の通信がわつたので少佐の無事なることが分つた、今其詳報に據ると少佐は北緯八十七度六分の所まで達して最早北に進むことが出來ないので歸途に就いた次第である、しかし此北緯八十七度六分の所と云ふのは北極へ餘す所僅に二百哩の距離で前樣に北へ進んだノドムドから少佐の外にないのである、即ち米國旗は人跡未到の地に榮ある名譽を得たのである、千九百年に伊太利のアブルツチ親王が北極探險に出掛けたとき、其一行のカグニ大佐が達した地點に比べると少佐は夫れよりも北へ凡そ三十八哩進んで居る、又千八百九十五年にナンセン博士の達した點よりも凡そ五十八哩の北である、少佐は今度で九回目の北極探險で充分經驗しては居るが今度の探險が非常に困難で有たとは言迄もない計て極て北へ向最後の突進を試みたのは今年の二月で絶えず後方と聯絡を保つやうにしたが、所所に水面が現はれる、或は氷の山が横はつて居て終に聯絡が絶えて橇を曳く犬を八頭まで殺して食するに至つたさうだ、少佐は從來の經驗で北極探險には出來る丈エスキモー人を利用するが最良の方法であると考へて今度は務めて之を利用したらしい、しかし今度の探險も少佐にしては充分に目的を達することが出來なかつたのであるが、少佐が歸國したら色色新しい事實を知る事が出來るであらう、今北極探險の途に就いて居るものが少佐以外に三組ある、此等は何れも極めて成功するか分らないが、一歩一歩北極へ近づくとしても最早二百哩であるから、遠からず北極を發見するものが必ず有ることと思はれる、北極のことは最早大抵分て居るから此上強て北極を發見する必要がないと云ふ人もあるが、大抵分たといふまでになつたのは今日まで多くの人が辛苦して出掛た結果である、及實際發見して見なくては果して今考へて居る通てあるか何か分るものではない、其上ナンゼン氏の紀行などは堅忍不抜の精神を養ふに頗る適したもので北極探險の記事ほど青年に良い讀物はない、日本人も北極探險などに出掛けるやうでなくては世界的に活動する國民となるのはまだ〳〵遠いことと思はれる

●滿妻難

のろけ男『私が今の嬶……申したいが實は滿妻です。其滿妻は去年營口に來て始めて目染め、戀に焦れて連れ合ひになつたのですが一年も一所に居るとかびくさいのが鼻に付きますから、ちよつと摘み食ひに安料理屋を覗いたとおもつて下さい、すると大の燒餅で、すぐ後から尋ねて來て、今晩は、内の人が居てやおまへんかと帳場に坐り込みましたから、姐さんが出て如何か知りませんと挨拶すると、嬶ア奴、表の上の浮水のやうに澄しくさつて、さうたすかそうも内の人の臭ひがするやうたすと斯う申します、嬶の事を譽めるちやアないが豪い鼻でせう、それから眞平御免やすと吐して家搜しと洒落ます、サー大變と思つたが料理屋がダツタ一間と來ておるから直ぐに見付りまして引摺つて伴れ歸る、餘り業腹いから其お多福面を一つ二つ御見舞申しかるでせう、所が泣いて出て行くと平生の通りに斯う來るでせう、オー出て行け、オドレかと、荷物といつても元が淫賣上りですから、柳行李一つしかないのです。柳行李をポーンと表に投出してやるぜてうと、雪溶けて泥塗りかやーやから、嬶ア如プンプン憤つて今度は本當に出て行きました、其で留守になつて見ると不自由で耐りませんから、とう〳〵十五、六日目に捜し出し拜むやうにして連歸ると今度はつけあがりますから、又候鼻に付いて料理屋覗きを始める、矢つ張り附いてくる指に障つて堪りませんから撲ります、此間に撲り方がひどく少しばかり疵が付きましたが藥代を十圓出せと吹き掛け推問答の末とう〳〵五圓だけふんだくられした不都合な、奴ちやア御座りませんか、可愛亭主か藥代を取るなんテ、私も御蕎が悪いからフイと出る、すると嬶ア如後から例の内の人が居てやおまへんかを極め込み方々の料理屋を廻つたさうですよ。私は方達の所で一杯飲んで歸つて寐て居ましたすると如何です、夜明の三時頃にシヨボ〳〵歸つて來ました、今度こそ敵討た、優曇華の花咲く時に逢ひにけりで、散散に責めると吐すことが面白い、餘りあんたが遲ひさかい、尋ね歩いておましたナニ色男……それは嘘やといひますから、貴樣のやうな浮氣ものは不要ぬサツサと出て行けと威しますと、それなら私が證據人を伴れて來ますさかつたんかと吐かして驅下駄の音高く出て行きました、何をするであらうと狸寢入て待つて居ますと、方々の料理屋から可愛さうに仲居さん小那が起し十二三人も連れて來たのには流石の私も膽を潰しました、とても私の嬶ばかりは蹉張り手が附けられません、皆さん如何です滿妻も一寸考へものですせ」聽衆「これはマア飛んだおのろけ。」

●郵便切手で鐵道の布設　山芋化して鰻となり蛤化して雀となるといふやうな架空の話でも何でもなく讀んで行けば一目瞭然たる此稀君十但丁堡發特報によると土耳其政府は○滿洲岸の一州ヘヂヤズに鐵道布設の計畫ある處布設費に窮した所から○日まで發行した郵便切手を全部取揃へて賣り出し春命を集むることゝなり○で結局皇帝の命令の下に特別委員が任命せられ昔からの切手の中で缺けて居るものは造幣局で製造することゝなつた、すると全部揃つた切手とあらは排卒は十万圓で買ひませうと云ひ出したものもあつたが委員は左なか〳〵そんなことでは賣れぬと云つて跳ね附けたげな

稻正宗
營口　電話二〇　盛進商行

松書龍

▲大和館の松飾を犬が汚して居ました（實見生）▲第一市場の跡へ小屋掛けが出來て居る日本の商人は抜目がない（通行生）▲一力のお八重さん、藝の手は中中達者なものか今二三度寒聲を取つたらはとおもひますよ、日本館のお歸さんも抜け目がないわしかし來るお客を皆ンな乘物とおもつてると間違ひますぞ、第三のお雪さん江戸辯を使へは猶ほ好いが、年子さんは名前ばかり換えますね其都度好ひ人の代るのではないか、金城館の金八さんは今春進水式を行ふ承るが造船技師は誰れかね、金勝さんは借金が能く出來るさうたね、万梅のぽんこさん似せ氣には困るよ、万直しの小万さん笑ふて齒を出しなになるな（不色男）▲營口の或る美人に飯炊きに行くか支那人の妾に行くかと尋ねたら妾に行くことを希ふと白した（試驗生）▲僕は昨夜一時頃、馬賊に捕らへられたとおもつたら騎馬巡警であつた（膽病翁）▲滿洲の硬派給正月の遊戲は何が一番滿洲に適するか考へて呉れ給へ（退屈生）

西洋料理　仕出し　迅速調進　玉突
牛莊ホテル　河岸通り　電話一二六番

移轉廣告
今般元神廟街二百八十六號元軍政署北側に移轉致候也
正隆銀行本店
電話　支配人室三四一　事務室二一〇

資本金貳千四百萬圓
積立金壹千參百七拾萬圓
本店　橫濱
支店出張所　神戸　東京　長崎　大阪　倫敦　里昂　紐育　桑港　布哇　孟買　香港　上海　漢口　天津　北京　大連　旅順　奉天　遼陽　芝罘　鐵嶺　安東縣
（電話十番支配人室一百八番事務室）
橫濱正金銀行　牛莊支店

洋鐵　鋼
麥粉、白糖、白米、玻璃板、亞鉛板、鐵線、洋釘類、建築土工用具及船具類
其他諸機械の製作修繕
合資會社　秋田商會支店
合資會社　秋田商會支店

新荷着
朝日ビール
右新荷到着候ニ付今般特約店大原洋行ニテ一手代理販賣ヲ被致候間弊店同樣御引立ノ上多少ニ拘ハラズ御注文相願度希望ノ至リニ御座候
朝日ビール　松茂洋行商品部
特約販賣店　大原洋行　電話二二三

初春の御壽
芽出度申納候
舊年中は格別の御贔負に預り忝く千萬深く御厚禮申上候
尚本年も舊に倍し御引立の程家内一同伏て奉願上候尚又豫て新築中の家屋も愈々落成り仕仮住居を引拂ひ本館に移轉し改曆と共に御料理は申すまでもなく諸事萬端一層入念仕にべく候間永當〳〵御愛顧を賜れかし
羊の元旦
營口新市街　祇園閣　主人敬白（電話一四四番）

廣告
一、白木綿袋　約參万貳千枚
一、古品獻納毛布　約千五百枚
一、薫乾牛皮　貳百枚
一、新品烏拉靴　約壹万組
一、古品仝　約貳万一千組
一、漬物　約六十貫
來月十日前十一時入札ニ附ス委細ハ間合セアレ
明治三十九年十二月廿九日
奉天關東倉庫

●森病院　電話五五一
一診察　自午前八時至正午十二時　自午後三時至午後五時
一往診　午後三時より
▲患者の入院治療を諾す
▲貧困患者の施療は正午十二時より二時迄
▲姙婦の入院を諾す（産婆赤垣はる子）
院長　醫學得業士　森矯
副院長　醫學得業士　長船郁太郎
營口永世街　森病院

謹賀新年
陶磁器舗
大連市吉野町二丁目　福正洋行
鐵嶺西門外角　福藤洋行
東洋銅鐵器　和洋雜貨商
營口永世街　藤飯洋行
鐵嶺西門外　藤飯洋行支店

恭賀新年
陸軍御用達　雜貨　活版業
遼陽西門街　向井洋行
行主　向井龍造

謹賀新年
鐵嶺　回生療病院
院長　醫學得業士　山田信吉

謹賀新年
舊年中は種々御引立を蒙り難有尚本年も不相變御愛顧の程伏て願上候　頓首
一月元旦
鐵嶺西門街大通り　鐵嶺ホテル　館主　中野忠治

●防長白米
●木炭　薪
●（萬）醬油（サ醬油）
●石炭大販賣
●鮑松茸筍各種鑵詰類●味噌
板及材木類●清酒各種
營口元神廟街二二九（電話四十七）
二百斤以上御購求の御方へは殊に弊店より配達可仕候
（ト）丸藤洋行　井上廣平

南滿洲鐵道……大石橋にて乘換
營口往復の者は大石橋にて乘換へ蘇家屯撫順線各驛往復の者は蘇家屯にて乘換へ
一、小兒四歳未滿は無料四歳以上十……

謹賀新年

正隆銀行

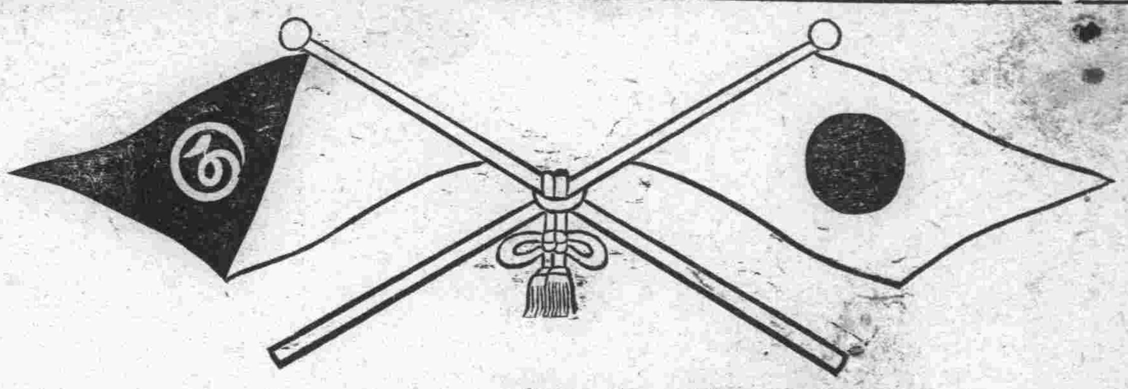
營口元神廟街二八六
支配人室　三四一
電話　事務室　二一〇

總經理人　深水十八

隆記洋行

西分店

西營口老爺閣東小紅樓西南側　電話四二



船舶業
貿易業
鐵道輸送業
倉庫業
保險代理店

松茂洋行

本店　日本大坂　河邊九畏三郎商店

出張所

大連監部通二丁目　松茂洋行出張所
奉天小西門外　松茂洋行出張所
鐵嶺西門外　松茂洋行出張所

昌圖　長春

謹賀新年
飯塚工程局

謹年新年

舊年中は一方ならぬ御引立を蒙り難有奉拜謝候猶本年も不相變御愛顧の程奉希上候　敬白

一月元旦

營口新市街青柳街二丁目

三日月樓主

（電話三〇六番）

謹賀新年

十合呉服店

大阪　京都　神戸

恭賀新年

本行在鐵嶺開設發售綿布綿線絨毛布各色東洋被面並新到諸貨一應發賣願仕商賜顧速移玉到號購買可也

鉄嶺火神廟街　穗積洋行
仝東門外　仝支店
寬城子北門内北大街　仝支店